

神靈矢口渡

座本 豊 竹 新 太 夫

片見覺辭に曰く身既に死して神以て靈なり。子が魂魄鬼の雄となる。されば國事に死する者。精神強壯武毅長く。百鬼の雄傑たるとかや。遠く古を考ふれば。異國の伯有我が朝の。晋家の例目のあたり。武藏國荏原の郡。矢口の村に鎮座まします。

新田大明神の御神徳。オン靈驗ありとも。中々に。申すも恐れ大君の。御代傳はりて九十九代後光嚴院のしろし召す。天に二つの日の本や南北朝と引分かれ。都の花の歸り咲き吉野の内裏に座ますは。後醍醐帝第七の王子後村上の皇子。假の皇居も月移り。爰も雲井の御所作り經營。フシ残る方もなし。附添ひ給ふ公卿には。四條大納言陸資卿。坊門。宰相清忠卿。

其外公卿殿上人禮儀正しく參列ある。頃は延文四つの年菊月半。召に依つて參内と披露して。新田左兵衛佐義興。智仁勇備の御貌御階のッ本に平伏す。陸資卿勿取直しイカニ義興。御汝を召す事餘の儀ならず。父義貞北國に亡び。楠父子討死してより無勢の南朝を見侮り。尊氏押し

て將軍に任じ。梓義詮を都に差置き。其身を鎌倉に引籠り。四海を併吞せんや勢。捨置かば御大事。地汝を討手に遣はすべしと。之なる清忠の奏聞。此事勅問あらん爲といと。ッこまやかなる詔。義興はつと袖かき合はせ。同同じ清和の流れにて。一門ながら朝敵の首領といひ。父の仇にて候へば。尊氏を亡さんと晝夜軍

には功なきに所領をあたへ。疎き者は忠臣をも退ける。これを惡む者多ければ。足利家内亂を生ぜん事遠かるべからず。其時節を考へて。楠正儀と心を合はせ。京鎌倉を亡さんは。義興が方寸に候。天の時至らざるに只今義興討つて出でなば

御勢少なき皇居の守護。地心許なく候と。勅答あれば。坊門清忠。御ヤアまはり遠き義興が軍慮。足利家の内亂を待つて。謀をなさんなどは。相手のしごこなひを待たんとて。端の歩兵をつく下手象拱。差當つたる理に叶はず。先んずる時は人を制し。後るゝ時は制せらるゝの本文。地片時も早く討つて出で。尊氏

を亡せよと。横紙破の一言を。聞流して
義興公。阿ハア詩歌管絃は天上の御玩。
軍の事は武門の職。百度戦ひ百度勝つも
善の善たる物ならず。謀を帷幕の内に
廻らし。勝つ事を千里の外に決するは。
地身下肖なれども義興が軍慮の奥儀。阿當
時守護の武士少き皇居を捨てて軍を出さ
ば。義詮が京都の軍勢。襲ひ奉らんは必
定。其もと亂るゝ御大事此儀は是非に
御無用と。いはせも立てず坊門清忠ヤア
過言なり義興。阿官軍少きに似たれども。
和田楠を始めとして。皇居の守人いくら
もあり汝一人居らぬとて。御味方事缺く
べきか。ム、聞えたく。軍慮にかこつ
け尻込みするは。地軍が怖いか。恐しい
か。卑怯未練の臆病者。阿コリヤ論言は
汗のごとし。違背すれば違勅の科。討手
に行くか。但しはいやか。なんとく〜とせ
りかけく。地己が工を押隠し。勅定こ

かしのッシきめ歴状。義興公胸にすゑか
ね。軍慮の妨天下の仇。引きおろして只
一討と。立寄りしが待て暫し。禁裡の驢
ぎ君への恐れ。さりながら時節至らぬ今
度の討手拙き負をなすならば。先祖の名
をれ家の恥。父義貞叔父義助。楠親子が
跡を追ひ。潔く討死し。末代に名を穢さじ
と。ヌエ思ひ定めて御前に向ひ。阿勅定の
趣。畏り奉る。それについて一つの願ひ。
先祖頼光より傳はりし。水破兵破の二つ
の矢。代々源家の重寶たる故父義貞所
持せし所。討死の其後北國より差上げし
を。地大内に止め給ふよし。何卒下し給
はる様。奏聞願ひ奉ると。ヌエ思ひ込んで
願ふにぞ。清忠卿せいら笑ひ。阿ヤア兪忽
なり義興。忝くも二筋の矢は。養由が娘
椒花女より。汝が先祖頼光へ。夢中に授
けし希代の重寶。代々源氏の棟梁たる者
これを所持す。汝が父義貞は左中將に任

じ。總軍の大將たる故。矢を所持しても
苦しからず。汝は漸く左兵衛佐にて昇殿
も叶はず。地あくちも切れぬ分際で。矢
を望まんとは不敵々々。及ばぬ願ひとッ
シやり込められ。地こたへにこたゆる義
興公。無念の賊血をそゝぎ。思ひ詰め
たるッシ共有様。地數慮何とか思しけん。
隆資卿を近く召され。しかくの。勅定
あれば。ハツト答へて隆資卿。玉座に銜
りし二つの矢、恭しく携へて。階近くッ
シおり立ち給ひ。阿切なる汝が望みに任
せ。二つの矢を下し給はる。有難く頂戴
せよと。地渡し給へば義興公。ハ、ハ、ハ、
はつと飛びしさり。家の面目身の冥加此
上や候べきと歡び給へば。地清忠は不承
不承のッシ拂頂面。地君は二人が胸の内
元來知らせ給はねば。阿早く朝敵討亡
し。宸襟休め奉れと。地御簾さつとおり
ければ。諸卿各々退出ある。ッシ義興公は

討死と思ひ定めし御覺悟。これぞ内裏の
見納めと名殘惜げに。見返り。見返り。
猛き心も打ちしをれしづく。御門に。
さしかゝる。地思ひも寄りぬ落穴。踏込
み給ふ頭の上。丈に等しき大石の。どう
ど落つるを身をかため。兩手にしつかと
フシ受止めて。四エイヤウンと飛上り。ア
アラ心得ぬ此有様。此穴へ踏込まば。と
たんの拍子に此石の。上より落つる仕掛
の工。扱は此義興を。なき者にせん爲に。
佞人共の計らひよな。ハアをこがましや
傍。いたや。たとへいかなる磐石たりと
も。義興が爲には塊。同然。さりながら
かゝる非常の此石を。内裏に置かんと穢
らはしと。地兩手をすつと差しのべて。
築地の外へ投げ給ふ。表に控へし伏勢の
天窓の上へ落ちかゝれば。何かは以てた
まるべき。壓に打たれて十餘人微塵にな
つて。コシ死してげり。地残りし者ども身

の毛立ち。天狗の所爲か魔の業か。こは
や〜と一同に。ハアミシ跡をも見ずして
逃歸る。地凡人ならぬ勇猛力末。世に。新
田大明神と拜まれ給ふも。大三郎行末は誰
が膚ふれん紅の花。案じ過しを枕に語れ。
ナオスシ。諷ふ一節。媚ける。爰ぞ都の色
里へ誰も尋ねて九條の町。オトリ井筒が。内
の居續は。新田小太郎義興公。遊び勞れ
し。居眠りに。地太夫の膝を脇息の興
を催ぼす。コシ牽頭の小吉。コリヤ〜
五作汝が小唄ではお目が覺めぬ。昨日の
意趣に一番參ろか。ヲ、望みならやりか
けう。コレお玉殿。三味線頼む。地アイと
返事に中居が三味線。しかつべらしく差
向ひ。問ひましよ〜。何でも問はしや
れ。問ひましよ〜。問はしやれ〜。小
袖は。羽二重。刀は正宗。坊主は。鈍才。お
醫者は。寸伯。女は。おもん。男は。お安。ヤ
ア待て〜。今のは。男にお安とは。サア

一盃呑まさにや置かぬと。地寄つてかゝ
つて。フシつきかれば。阿ア、コリヤ〜
餘り騒ぐな森しいと。地言はれて二人が。コ
ソリヤ。コソ。旦那のお目が覺めた。コレ太
夫。お目覺しに此大盃で。旦那へ一つ上
げなされ。コレ五作子。主様は風引きなさ
つて。頭痛がするとおつしやつてぢや。ア
イヤ〜。其頭痛の。故事來歴。かの慈姑め
が。俺よりはお前が毒ぢやというた格で。
風邪よりは太夫様ナウ小吉。ヲイ三人に
成つて二人が淋しがるといふ。付合の通
句の通り。人交ぜずのちん〜こつてり。
申し旦那。内にはかりござらずとも太夫
様を連れまして。東山か高尾の紅葉。イ
ヤ〜おれはあんまり長逗留。今朝も兄
まだふらついて歸らねば。堅い顔で呵つ
て居やらう。ハテえいわいなせてマア
二三日。コリヤ太夫様のが御尤も。淋しく

なるど歸らうとおしやる。サアわつさり
と酒にしよう。仲居衆。銚子と地立騒げば
追々出づる仲居ども。阿さつきにいうて
やりなはつた。江戸兵衛様が來なはつた。
追付け爰へ見えるぞ。地都では藝子と
名付け東では踊らぬ時も踊子のすんとし
て又譚しきは夫者と町の藍こび茶物好し
たる袖裾も引かば轉ばん其風情。地義峯公
はじろく。不思議さうに顔打眺め。
阿おりや江戸兵衛というた故。男藝者か
と思つて居たりや。コリヤ美しい踊子だ。
サイナ。あの子はナ此中江戸から登りな
はつて。どうすべいかうすべいと。まだ
阿が直らぬさかいで。ある名は呼ばいで。
江戸兵衛様と仇名ばかり呼ぶわいな。ム
ムそれで聞えた。ヤ申し旦那。同じ兵衛
でも少しの事で。助兵衛でなうて仕合せ
でござります。アイきついおてらしさ。わ
つちや此間上りいして。まだ勝手を知ら

ないから江戸詞を言ひやすに由餘り笑つ
てくれなさるな。アイやおれも上州の新
田で育つた故京の詞はなまけて悪い。な
らうなら太夫なども。江戸の詞にしてほ
しい。アイお前の折々さう言はんすさか
いで。わたしも此間藝子様に江戸詞を習
ひやんした。稽古にいうて見やんしよう
と江戸兵衛が地胸ぐら取つて。阿コレナ
ぬしや詰まりんせんよ。わつちが方を打
ちやつて。此中も丁子屋のみな鶴様の所
へいかんしたを。子供らが見付けんした
わナ。見なんしアノ。まじめな顔わいほん
にあつかましい。餘り馬鹿らしう有りい
すによ。ホ、、、ヲ、恥かしてッ袖覆へ
ば。阿ハ、、、コリヤ太夫様出来ました。
地どうもいへぬとそゝり立ち一度にッシド
つと打笑ふ。阿ナント小吉も五作も。閉
口か。イヤモ。閉口の段ちやござりませ
ぬ。閉口次手に此所で。江戸役者の聲色

を。やりかけ山。江戸兵衛様弾いて下ん
せ。オンドこれもお江戸に隠れなき。市川
の團十郎で申しましょ。市川の。三升でせ
い。阿ア、コリヤく。いけもせぬ聲色
置きにしる。南無三寶又付けた。折角つか
ひ掛けた所をとめられ。痲病にならねば
よいがと。地天窓をかけた仲居のお玉。
阿申し江戸兵衛様。お前此中言ひなはつ
た。きやんとやら。わんとやら。喰付く
様な喧嘩の身ぶりが見たいわいな。ヲ、
又身かへ久しいもんだよ。わつちや恥し
いによ。モ、、、そんな事ツたずつと流
しさ。コリヤよからう。地所望々々と口々
に。望めばッ立つて身拵へ。阿子供衆
その幌中取つてくれなと地いふ間に五作
が縁側の。布簾はつして當座の肩衣。阿東
西々々此所で京と江戸との喧嘩の身を致
し分けます。御神妙に御一覽下さりませ
う。其爲のお断り左様に地烟管で枕をか

ちくく。ママア上方の出入はナ。頭巾をかうかぶつて。草履下駄にてかういふ身ぶり。おつな胴聲を出して。コレく若い。ちよと橋詰迄出て貰ひやんしよ。ちよと下に居て下あれと。ヲ、此様なまだるい事で日の短い時の間にや合はぬによ。江戸の喧嘩は。枕巾をかう打懸けて。かう肩を力ませて。何のこんだはつつけめ。人を茶にしあがつたらぬが様な癡心漢は。鼻の穴へ花緒をすけて。何でも安賣り十九文日和下駄にしてくれべい。いまくしい置きあがれ。ホ、ホ、ホ、こんなものだと打笑へば。皆一同に打ちこけて。ヲシ興を催すばかりなり。地騒ぎの中に仲居が采配。何とかうする内夜が更けた。モウお休みと地いふ機會に然らば旦那又明日。何太夫様江戸兵衛様。ヲ、皆大儀だ歸つて休め。そんならもういなんすかえ。アイわつちもお暇お玉殿や三味線箱頼ん

ますによ。ヲ、皆様ようお出でたさばへ。アレ小吉様の又じやうだん。悪事しなさるな。聞さるなは妙聲の隣なり。りなり。の宵へ参らうか。らうかかうかの物案じ。あんじ宜しう頼みやすとどよめき。ツッ連れて立歸れば。地義岩公も一間の内オッリ涅槃のへ床に入り給ふ。地一間の内よりぶつつかは面ふくらせし坊主客。地どいつもこいつも初會だと思つて。餘りむごくしあがる。モウ來るかくと賣れぬ根附を見る様に。蒲團の上に待ちぼうけ。地いまくしいと言ひつゝ傍見廻し。相圖のしはぶき二つ三つ。跡より出づる竹澤監物秀時。江田判官景連有り合ふ褥を携へ出で。ヲシ先づくこれへと招すれば。地おめす臆せず褥の上どつかと居りし大入道。尊氏公の執權職。島山入道道誓とは言はねど。ヲシ顔に顯はれたり。地兩人は近く差寄り。地家内もふせ

り。娼妓どもも寐させ置き間を隔てたる此座敷。とくとお談じ申上げん。ホ、豫てより此入道天下に望みある故に。地防門の清忠と心を合せ。新田足利威を争ひ。合戦に及ぶ様に糸を引かせ。楠親子義貞なんども謀の圖をはづさせ。憤らせて討死させ尊氏一人になつたれば。折を見合せ刺し殺し清忠を王位に即け。此入道將軍職。お手前二人を兩執權と思へ共。地南朝にある新田義興。親にも勝る大は者。きやつが此世にある内は中々大望ひやつた其格で。尊氏追討の勅定ごかし焦れさせて討死さすか。それ迄もなく討取るかと様々の計略。地サアそこを存じて此判官。清忠殿としめし合はせ。地南朝へ忍び込みきやつが内裏を出づる時。門の上に大石を上げ置き。下には落し穴を仕掛け踏めば上から落ちる様に。工夫

を以て拵へ置きしに。詞サアお聞きなされ。豫て義興大力にて二十五人力ありとの噂故。三十人にて持兼る大石を。頭の上から落しかけしに。宙にて受留め刺へ。手鞠か小石を投げける様に。地築地の外へ投出し。此判官が伏勢十三人迄打殺され。近年の大しくじり。同イヤくそんな事では参るまい。此監物が思ひ付には弟の義岑め。此願へ入込みしこそ幸ひ。きやつから取入れ一思索。ヲ、其事は此入道も油断なく。二人の家來を牽頭に仕立てて付置いたり。ハア此監物は義岑が相手。臺と申す女郎をたらし込まんと色々贈物。様々に拵へてもこいつも賢き女にて義岑に心中立て。むざと大事も明されず。旁以て難儀至極。其上水破兵破の矢は武運の守となる故に。尊氏公も御懸望。これも義興が手に入れば。地鬼角こつちが皆すかたん。ハテどうがなと三人

が慾惡無道の思案とりく。横手を打つて竹澤監物あるぞく上分別。某は親入道より新田方の幕下に屬し。方々にて手柄もありしが。地義貞討死の其後は入道殿の御世話にて。尊氏公へ官仕へそれからの思付き。ム、然らば篤と一間にて陳合はさんいざ此方へと三人はオウ打連れへ奥へ入りにける。地思ひく。夢結ぶ座敷々々も子の刻過ぎ。一間を出づる義岑公。同ナウ臺其竹澤監物とやらはどうしてそなたを其様に。サイナ死んだ娘と私が顔が生寫し。娘ちやと思ふとて。紋日其外氣を付けて様々の贈物。地とくにもお前へいふ筈なれど。尊氏方の人なれば。方便も計られずと。今迄お耳へ入れませなんだ。同ム、今時の人心むさと氣は許されずと。地咄の半ば一間の内。はつたばた付く物音人音。先づくこちへと義岑公障子の。フシ陰に立忍ぶ。地透間もなく入道道誓。懐劍持ちし竹澤が。腕捻上げ怒りの大聲。同我をたらし遊所へ引出し。寝首かゝんず謀。エ、憎い奴と捻伏すれば。地竹澤無念の齒がみをなし。同汝が首を土産にして昔のよしみ新田方へ。奉公と工みしに。其方便の顯れしは。地エ、殘念やと起返るを。双物もぎ取り入道が縁よりどうど踏落し。同判官心得たりと刀の背打骨も砕けとぶち据る。竹澤息もたえく。に手足をもがき七轉八倒入道聲懸け。同モウよいく。一思ひに殺さんより世上の見ごらし。逆磔。其松にくくし付け。夜明けての上成敗せぬ。イカニモ左様と判官が。ぐつとしめ上げ。フシ猿つなぎ。同夜明けぬ内いざお歸り。泥坊めは此通り縛つて置けば氣遣なし。處刑は家來に言付けん。フシイザ歸らうと。兩人は。したり顔にて出て行く。地始終忍んで立聞く臺。手燭携

へ走り出で。庭に飛びおり漸うと。禁解
いて耳に口。竹澤様監物様と呼生ける
フシ息吹き返し。同ホ、臺殿か忝い。我も
昔のよしみ有れば。新田方へ奉公せんと。
兼々こなたへ頼め共。一旦尊氏へ随ひし
某故疑ふも尤。地一つの間を立てんとて
仕損ぜし残念やと。スエはら／＼とこ
ぼる。涙。臺も俱に貰ひ泣き。同ヲ、御
無念は御尤。私を娘も同然に。地思召し
て下さります。お心を疑ひてかういふ時
宜は私が科。こらへてやいのと取継れば。
同コレ／＼泣いて居る所でない。義岑公
お入りの事は兩人がけどつたれば。地討
手の來人も計りがたし。早々落し參らせ
よと。詞も終らぬ其所へ。どつと込入る
捕手の大勢。同ヤア／＼義岑此家に居る
をはかり知り。入道殿の^{くじ}下知を請け荒濱
軍次向うたり。恥を思はゞ腹を切れと。
フシ呼ばはり／＼亂れ入る。地臺を忍ばせ

竹澤監物。物をも言はずなき立つれば。
コリヤ叶はぬと大勢が表をさして逃げて
行く。地いつの間には入りけん。障子
の内より荒濱軍次臺を小脇にかい込ん
で。飛んで出づるを竹澤監物首筋掴んで
引戻し。拔身もぎ取り軍次が首。フシ討落
してつ立つてば。地障子開いて義岑公。
同ホ、監物疑ひ暗れた。地當座の褒美と
投出す一腰。ハア有難き御患。昔に變ら
ず御奉公。又も討手の來るは必定。同君
には早く御歸り奉公初め路次の御供。エ
そんならお歸りなさんすかえ。随分お怪
我の^地地ない様に頼みますると。フシ臺が名
残。同ヲ、我は裏より密に出でん。監物
は表より。委細は承知仕る。イケ。地ハア
ハツト表をさして。軍次り行く。地千早
振る。神の恵の岩清水。巫女が鼓も。聲
すめり。地新田左兵衛佐義興公。今日出
陣の龍頭^{龍頭}餓形打つたる五枚兜。緋緘の御

着長威あつて猛き御骨柄。同舍弟小太郎
義岑色香争ふ若武者の。花の姿や小櫻を
どし御供には竹澤監物秀時。其外家の子
士卒迄萬燈の火に映じたる。鎧の金物武
の光實も。フシゆゝしく見えにける。地義興
仰せ出さるゝはイカニ方々。同此度朝敵
足利尊氏。討亡せとの勅説なれども。必定
今度の一戦は。はか／＼しき勝利はある
まじ。地關の外は武將の下知。軍の事は
臣に任せ時節の來るを待ち給へと色々諫
め申せども。同親義貞には劣りし器量。
卑怯至極と清忠が惡口。違て諫めば臆す
るに似たり。地先祖の名迄穢さん無念さ。
天運未だ至らずとも。正八幡の御利生。源
氏を守りましますと。同此宮居にあのご
とく。神慮を仰ぐ萬燈は。地神の恵を頭
に戴き。一戦に討亡し。宸襟やすんじ奉
らん爲。同ヤアイカニ監物。汝は新參な
がら武蔵の國の産と聞く。敵地の案内よ

つく知らん。此度の先陣は汝たるべし。地猶も忠勤動むべしと。仰せに監物頭を下げ。阿ハア、有難き御詞。新參の某。大役仰付けらるゝ段武士の面目身の本望。地君の武勇に聞きおぢし。脚腰立たぬ足利勢。味方は一致の逸武者。只一様に踏破る味方の勝利疑ひなし。片時も早く御出陣と。萬幸、一度に悦びの。地聲に勇みの御大將。阿イザ神前へ御暇。賽もろしの柏掌の。地音かあらぬか砂煙はつと吹き来る風に連れ。一度に消ゆる燈籠の。コハリ皆常闇の神の告げ續に。フシ残る一燈の。地光は薄き武運かと。胸に當りし義興公。所詮勝利はなき身ぞと。極めし上に極まる覺悟。心に徹して小太郎も。あら心得ぬ此不思議。阿尤も火を烈しくなすも風。消ゆるも風とは言ひながら。燈し立てたる萬燈の。一時に消えしは今度の一戦。敗軍との告げなるか。御身の

上も覺束なし地とくと賢慮を廻らされ。然るべしとのたまへば。竹澤進んでコハ義岑公の仰せとも存ぜず。阿神力勇者に勝つ事あたはず。何のこれしきに神の告げ。今南朝北朝と引分れ。威勢にはびこる尊氏が。持つたる萬燈を。地まつ此如く打消して。南朝一統の世になさんとの知らせの一燈。目出度き奇瑞に候と底工ある秀時が。フシ詞を飾つて申しける。地義興亮爾と打笑み給ひ。阿ホ、よくも祝ひし監物。義興思ふ仔細あれば。義岑は只一人。密に都へ立歸り。禁廷の守護怠るなど。地仰せに義岑大きに驚き。阿コハ兄上の詞とも覺えず。一旦御供申せし某。目前怪しき神の御告。いよ／＼以て心得ず。片時もお傍を離るゝ事は思ひもよらず。地生きるも死ぬるも兄弟一所。但し用に立たぬ腰抜けと思召しての御事かと。言はせも果てずイ、ヤ左にあらず。阿命

を捨つるは君の爲。子孫を殘すは家の爲。先祖源の頼光より傳りし。水破兵破の二筋の矢。敵足利尊氏も同じ清和の流れなれば。豫て望と聞き及ぶ。參内の折からも。清忠が支へしかど。地君恩の有難さ。某に下し賜はりしは。弓矢の冥加家の響。阿戰場に持つならば若し運盡きて兄弟一所。討死せんも計られず。さある時は家の重寶。敵方へ渡さんは先祖へ不孝武名の疵。又心得ぬは坊門清忠。必定朝敵一味の輩。地我々都を出るならば其虚に乗らん彼等が工。我に代つて君を守護し。必ず忠勤怠るな。天の命數限りあり若しも運命盡き果て身は戰場に曝すとも。名は末代に輝さん。汝は都へ立歸り。時節を待つて消え残る火影の如く源の。氏の光を輝かせ。南朝世々の忠臣と末代に武名を上げよ。阿此詞を用ひずば。未來永々勘當ぞと。地必死と定めし武士の口には

言はで心にはこれ今生の別れぞと。さし
もゆくしき御大将。恩愛離別の。ツツ目の
内に満る。涙の伏勢を防ぐ。智謀はなか
りけり。地義舉も勘當との。重き詞に詮
方も。涙を押へて。阿ハ、ア畏り奉る。勝負
は時の運なればたとへ敗軍あるととも。
必ず短慮に思さずとも。目出度く凱陣待
ちます。地ホ、聞入れあつて満足々々。
今汝に與へ置く二筋の矢を心のかため。
二張の弓の名を取るな。阿ヤアくめん
く。徳家八郎重虎は軍勢催促に遣はし。
此所にはあらねども斯くと下知を傳へた
れば。追々跡より駆け付けん。地イザ出
陣と。仰せの内引出すお召の白栗毛に。
ゆらりとツツめせば。地義舉は見上げお
ろす血筋の別れ。武士の盛を吹きちらす
無常の。嵐櫻井の親子の思ひ。楠が名は
磐石と堅めたる。義心に劣らぬ義興公障
泥立てたる。鎧の鳩胸軍の。翅と駆けける

駿足の跡に随ふ諸軍勢。飛ぶがごとくに。
ツツかけり行く。地跡に義舉しみるくと。
肝にこたゆる同胞の。エ別れに心。しを
しをと影見ゆる迄。仲上り。見送る影も
旗の手の。次第々々に遠ざかれば。エ涙
をふくんで立つたる折から。思ひがけな
き宮居の陰。どつとツツ上げたる閑の聲。
地スハ何者の寄するぞと。傍を睨んで立
つたる所に。阿ヤアく新田小太郎義舉。
見参と聲かけて。地蹄を飛ばす。駒下駄
や。手太夫より上げ袴の八文字。どんなお敵
も。弓張の目元の月や花の顔。戀の。臺
が寄せかけて。意氣と派手との。合討手
の大将。跡からどやぐ。禿末社。阿ヤア
そなたは臺。コリヤどうちやと。地力身
し腕も拍子抜け。敵は敵でも。ツツ憎から
ず。地臺は傍見廻して。阿ア、あの悔りの
顔わいなア。いつぞや廓の別れの時。兄
御様と御一所に。武藏とやらへ軍しに。

いかねばならぬとおつしやつた。聞くと
持病の此瘡。どうぞいかずと濟むやうと。
神々様へ立願やら。はだし参りのかひも
なう。けふは出陣なさると。聞いて身
も世もあられぬ故。お顔が見たさ逢ひた
さに。地あの衆頼んで遠い道。來ごとは
來ても大勢の。阿侍様方兄御様の前とい
ひ。物いふ事もならぬ品。どうかかうか
と思ふ内。結ぶの神の義興様。都にお前
を残すとは。粹の上もりヲ、嬉し。エ、
何ぢやいな濟まぬ顔して。人の思ふ様に
もない。地憎い男と鑑ごし。阿ア、いた。
つめつても擲いても。こつちの手が捕む
ばかり。コレいなア。エ、そんな機嫌ぢ
やないわいの。どう思ひ廻しても。一所
に行かねば兄上の。御身の上も覺束なし。
ア、申しく旦那。お前をやつては太夫
様より此五作がきつい難儀。ヲ、それを
れ。太夫様もよくく思召せばこそ。

傾城の。晝蔭程に思ひ詰め。どうぞ今一度お顔が見たいと。屋敷方の女中方が。芝居行きか何ぞの様に夜の九つからどつ

さくさ。道は飛ぶやら駈るやら。外八文字も一文字。所にやんだお前の出陣。悦

び事の我等が趣向。地お敵の旦那を討つてしめる寄手の大将太夫様。四方を取巻

く此鎗手。亂調に打つ太鼓持廣げる指の亂杭逆茂木酒肴。兵糧のコレくくコレ

レく此提重幸ひの幕の内。地跡賑はしに呑みかけう堅い姿のお床入り。コレ

門出の笑ひ本サ、作物や乾物もとは違ふ。生の物を生でお目にかける。サア

サア地お出でと無理やりに。道に弱る色の道。女よれる神がきに是非なくッ

引かれ入り給ふ。地跡に二人はしたり顔。兼て望みのかの物。引つたくつて主人へ渡せば褒美はずつしり。色男でも追

の義孝。あら立てては事の破れと。地幕

を覗いてうまいぞ。例の大酒のとりつべきアノ紛れに奪取らん汝は傍りに眼を配れ。ヲ、サ合點首尾よくせよと。

小吉は幕へ跡には五作。四方に氣配リコ

へり忍び足。なんなく御矢盗み取り。小吉が小聲に上首尾々々々。阿是さへ取れば

義孝を。ぶち殺すは手間入らず。片時も早く主人へ手渡しサアこいと。地逸足出

してッしかけり行く。地俄に騒ぐ幕の内。かけ出る義孝に。取付き縫る臺もともに。

引摺られても放さばこそコレく申し殿様。阿氣相かへてコリヤ何事。なんぞ夢

でも御覽じたか。コレ氣を鎮めて下さんせ。ヤア何事とは。兄義興より預りし大

切の二筋の矢。思ひも寄らぬ紛失。兼て尊氏壘望と聞き。敵方へ奪はれては味方

の不吉我が越度。地兄上への申譯と。差添抜く手に取付く臺。阿イヤく放せ。

マ、マア待つて下さんせ。ヲ、道理ぢ

やくくが。コレ。申し。今お果てなされては。誰が残つて御矢の詮義。兄御様へ此様子。申上げる人もない。もうかうなつた上からは。再び廓へ歸らぬ胸。身を碎いても詮議して。其上で叶はずば。私

も一所に冥途のお供。地死ぬる命は惜しからねど。此御難儀も皆私故。コレ堪

忍して暫くの。お命ながらへ地野の末。山の奥までも夫よ妻よと呼び呼ばれ。一

所に居たらわしや本望。思案して下さんせと。女心のくどくどと跡や先立つッ

涙なり。阿ム、尤もくよく言うた。此所で相果てなば。盜賊の詮議もならず。

大死となる骸の恥辱。一先づ此場を立退いて。草を分かつて御矢の行方。地定め

なき身の俄旅小褌引上げ帯引締め。身拵へする間もなく。引返して二人の牽頭。

跡に付添ふ數多の家來。ソレ討殺せと追取り巻く。阿ヤア合點の行かぬ二人の奴

の義孝。あら立てては事の破れと。地幕

マ、マア待つて下さんせ。ヲ、道理ぢ

取り巻く。阿ヤア合點の行かぬ二人の奴

原。扱は御矢を奪取りしも。汝等二人に極つたナ。何國の誰に頼まれしサア。眞直ぐに白狀せよ。ヤアちよこさいな詮議だて。引つくとて主人へ土産。地アレ打掃多よと聲に連れ。捕つたとかゝるを身をかはし。投げする蹴する踏飛ばし。手を盡して働けど。敵は大勢身は一つ。見るにハア、豪が案じ助けん方便も女業。群る大勢義卒の。手取り足取り打倒し。既に危き折こそあれ。篠塚八郎重虎は主君のお供の後ればせ。かくと見るより飛びかゝり。家來を投退け踏散らし。様子聞く間も足弱連れ。此場を一先づ落ちさせ給へ早うと見送つて。地宮居の前に鳥居立ち。遁さぬやらぬと家來共。兩足兩腕數十人。押せどしやくれど動かばこそ。時にこゝぼやく打笑ひ。ム、ハ、ハ、ハ、うづ虫めらがほでてんがう。新田の御内に隠れなき。四天王と

呼ばれたる篠塚伊賀守が嫡子八郎重虎。此兩足はえ抜きの。大佛柱を齧鼠。動かぬ事いかぬ事。助けたとて殺したとて。高の知れたる下駄ども。早く此場をなれ。ヤア下腐とは推參なり。畠山入道の郎等石原丹治逸見ノ傳吾。姿をやつし義卒を討取る方便の來頭。ばい喰はせて奪うた御矢。主人へ渡せば新田の滅亡。廣言吐く前髪首。さらへ落せと切込む刀。柄と拳を一握り。ヲ、さうぬかせばモウ助けぬ。御矢の盜賊觀念と。一振ふつて打付けられ。ソレ遁すなと下知の下。どつと馳寄る雜人輩。引つ掴んでは人喋ばらりと三度投散らす。地無法不敵の石原逸見。隙を窺ひ切りかゝる。身をかはして鐵拳。素頭びつしやり石原藥。鐵瓦あたま。みぢんに碎け逸見傳吾。一度に息はたえにけり。地ヲ、氣味よし心地よし御矢の右所は畠山。都にあれば一大

事。かくと様子を若殿の。御身の上も覺束なし。一先づ館へ。イヤ、先づ我君に追付いて事の次第を申上げ。思案ぞあらんあら金の。土砂踏立つる猛虎の駈り。獅子奮迅の勢ひは。實も新田の十六騎。其隨一の勇士の拳。父も父たり子も子たり。二代の忠臣篠塚が武勇を。代々に傳へける。

第二

此月の名所を引きかへて。爰やかしこの鯨波。地矢並緒ふ小手差原。數たばしる武藏野の。空物凄き。フシ氣色かな。地新田左兵衛佐義興公。勅命もだし難ければ今度の合戦は。討死と覺悟極めし軍立て。馳違ふ馬煙太刀の踏音天地に響き。日を招く。魯楊が勢ひ山を抜く。項羽が力も是にはいかで勝るべき。瘞まず去らぬ戦ひに。さしも多勢の鎌倉勢。フシ色めき

立つて見えにける。地追來る敵を喰留めんと。鎌倉方の侍大將。江田ノ判官景連。家の子郎等前後を圍ひ。太刀抜きかさし驅向ひ。手を碎いたる働きに勝ちほこつたる官軍も少ししらせて見えたる所に。

イヤ卑怯なり方々。竹澤監物秀時これにありと呼ばはつて。地判官目がけ討つてかゝれば。家來は主を討たせじと。駆け塞がるを竹澤が縦横無盡に討ち散らせば。敵はぬ赦せと逃げちるを。遁さじやらじと追つかけ行く。其隙に。地江田判官漸うと逃げのびて味方の加勢を松原に。フシ鎧突して居る所へ。地取つて返す竹澤監物まつしぐらに驅着くれば。判官も駆向ひ丁々はつしと渡り合ひ。合暫しが程は戦ひしが双方太刀をがらりと捨て互にむんずとコハリ組んで。えいや／＼と揉合ひしが。傍見廻はし起上り。フシ塵打拂ひ小聲になり。阿ナウ判官殿其以來

は。サレバ／＼敵味方と隔たれば互に書通の取遣りばかり。シテ其許の手都合は。いかにもいよ／＼上首尾々々々。始めの程は義興も中々微塵も氣をゆるさず。サ欺すに手なしと此監物。さま／＼の忠節顔。今では譜代同然に心置なく軍の相談。それは重疊。兼て謀し合せし通りい

でも貴様が討つて出ると。味方は逃げる貴様は追ふ。手柄させて義興に。取入らせんと思ふ故。先程は此判官も足早に逃げ申した。イヤモどうもいへぬ逃げぶり。よつ程下地がありさうな。フシハ、ハ、ハ、ハにが笑ひ。阿コレサ監物殿。義興が氣を緩すこそ幸ひ。飛びかゝつてすつぱりは。イヤけもない事／＼。さう早まる故先達ても吉野で貴様大しじり。知る通り力は強し。打物取つては鬼神同然。古今に稀な早業手利。ハテナウそんなら所詮いけまいか。さいかぬ所をやるが工夫。釋

迦でも喰はせる我等が方便委しくはこの白紙と。地渡せば取りて不審顔。阿何此白紙が思案とは。ヲ、サ假初ならぬ密事の計略落ちても人の見ぬ様に。此白紙に認め置き水にひたせば皆讀める。コリヤおそろだ。出來た／＼上分別と。地點き騒ぎフシしめし合はする折からに。地又も聞ゆる人馬の音。阿ワット任せと渡り合ひ。二打ち三打ち。地仕組の狂言遊るをハズメやらじと竹澤監物。返せフシ戻せと追うて行く。地義興公は只一騎。尊氏に近寄つて一時に勝負を決せんと駒を早めて駆け給ふ。大將と見るよりも。一度に寄來る鎌倉勢。八方より取圍み。我討取らんと切つてかゝる。阿シヤもの／＼しやと驅向ひ。追つかけ追ひ詰め切りまくる。地神變不思議の太刀風に。吹きさらされし木の葉武者。むら／＼はつと。フシ逃げて行く。

阿ヤア數にもたらぬ。雜兵どもうぬら

目懸くる義興ならず、イデ尊氏に見參と。
地 乗出さんとし給へば。コハリ馬は俄に高
嘶き打てどあふれど進まねば。同ム、扱
は。此茂みに伏勢ありと覺えたり。シヤ
何程の事あらんと。地 進まぬ馬をあふり
立て。駈け出し給ふ後より。案に違はず武
者一人。鎧の上に蓑打ちかけ顔を隠せし
強盜頭巾。馳行く馬の尾筒を掴んで引戻
せば。同ヤア推參なる曲者。討放さんは易
けれど此義興が乗つたる馬を引留めんと
はしをらし。ならば手柄に留めて見よ
と。地 一鞭當てて駈出す。馬は駭足乗人は
達者。踏出す足なみどう。合鎧の
金物からく。五のかけ聲。泥の音。
餘刃に響く武蔵野にまだ枯残る初冬の芒
刈萱女郎花亂れ。散りてぞ。三葉もみ合ひ
しが。地 きやつもしれ者踏みとめ引い
つ引かッしれつ争ふ内。地 頭巾は脱げて見
合す類。同ヤア其方は我が家來由兵兵庫

助信忠。ム、其意を得ざる今の振舞ひ。南
瀬六郎と其方は。我が家の政務を任せ故
郷新田の城を守らせ。妻子を預け置いた
るに城を打捨て来るのみならず。今尊氏
を追つかげんと。乗出せし此義興が。邪魔
せしは所存ばし。あつての事か速かに返
答せよと。以ての外の御怒り。地 兵庫助
は義興の姿を見上げ思はずも。はら
はらと涙を流し。同君勅命を蒙り給ひ。大
將たる御身にて。匹夫の勇を好ませ給ひ。
かくかろく。しき御振舞ひ。千斤の弩は
賊鼠の爲に發たすと。申す事は申さずと
てもよく御存じ。すべて此度の軍の様子
日々注進の趣にて。とくと思案を廻らす
に。日頃の軍慮に違はせ給へば。必定今度
の御出陣は。討死との御覺悟と。眠んだ
眼に違ひはあらじ。是非御留め申さんと
御館には六郎を残し置き。密に來つて様
子を伺ひ。御所存とくと見定めたり。地 御

氣に障る事ありとも。恥を忍び身をこら
し。年を重ね日を積みねば。大功はなしが
たし。一旦の御怒りに御身を失ひ給ひな
ば。誰あつて天子を守護し。朝敵を亡し
て。公家一統の代となさん。エ、情なき我
が君やと。或は怒り或は欺き詞を盡しッ
理をせむれば。地 義興公も内裏の首尾。
我が胸中を打明けて。物語らんかいやい
やく。彼に打明け語りなば。行先へ付き
まとひ諫めんは必定。所詮決せし覺悟な
れば。止めらるゝもむつかしと。さあらぬ
體にてイヤトヨ信忠。同それは皆汝が廻
り氣。討死の覺悟のとは。思ひも奇らぬ一
言。目に餘る敵の大勢。士卒の心を勵まさ
んと。手をおろしたる我が働き。イヤく
いか程に御意あつても。此兵庫がある内
は一騎立の御働きは金輪際お止め申す。
敵陣は此兵庫が。地 一當て當てて御目に
かけん。君は暫く御休息と。義脱ぎ捨てて

一さんに。敵陣さして、ッシ駆り行く。地大將の御座所尋ねさがして味方の軍勢。井彈正を始めとして。追々に駈來り。一息ほつとつぐ所へ。己が工を押隠す悪には智惠の竹澤監物。首二三級提げ來り。ッシ實檢に供ゆれば。地大將御覽じ。同ホイ監物。數度の高名手柄々々。軍の様子はなんとく。さん候頃日數日の戦ひにて勝に乘つたる御勢に。兵庫が荒手差加はり。手ひどき味方の軍配に。地勢果てたる鎌倉勢。尊氏を始めとして鎌倉さして逃げのびたり。この虚に乗つて攻めつけ給はじ。敵の大勢皆殺しと。工を隠すッシ勤めの詞。地こなたは固より討死と。覺悟極めし軍なれば。いつの時を可期すべきぞ。天下の爲には朝敵。我が爲には親の敵尊氏を。討たずんば再び生きては歸るまじ。いざ追つかけん陣觸せよと。男みにいさんで乗出し給ふ向うより。かけ來

るは由良兵庫助信忠かくと見るより提げし。敵の首投捨てて。嚙つらをしつかと取り。同コレ殿。最前も此兵庫が。詞を盡し申上げしに。まだ御合點が參りませぬ。エエ淺間しき御所存。日頃に變りし御振舞ひ。天魔が魅入れ候な。一旦負けし尊氏なれども。地鎌倉へ引籠らば中々容易く攻めがたし。一先づ故郷へ歸らせ給ひ。英氣を養ひ時節を見て。討つて出るが萬全の謀と。お馬のッシ口を引返せば。地せきにせいたる御大將。放せくとあせれども。こなたは手強き忠義の一圖。エ、面倒なと義興公。陣扇にて兵庫が顔。目鼻も分かず丁々々。打てど擲けど放さばこそ。同ヤア出陣の先を折り。味方の英氣をくじく曲者。敵に一味か二心か。勘當ちやそこ立ちされ。主従の縁これ限りと。地扇を顔へ投付け給へば。エ、御勘當とはお情ない。何國までも御諫めと又も廻るを鑑にて。蹴飛ばし〜あふり立て。諸軍一度に、ッシ進み行く。地跡に兵庫は呆れ果て。留めても留まらぬ御若氣。エ、是非もなき次第やと。エドつかと坐して男泣き。同縦へ御勦氣聚るとも。追つかけて御諫めと。地上立る折こそあれ。さつと吹來る。鷹。木の葉土石を卷上げ〜。傍に捨てたる陣扇。ともに、ッシ虚空へ吹上ぐれば。地兵庫は急度眼を付け。同アラ心得ぬ此有様。捨置かれし陣扇。土石とともに吹上げしは。我が君の御身の上。地善か悪か何にもせよ。扇の行方を見届けんと跡を。したうて。三軍へ行く空の。地上野の國新田の庄義興公の居城といつば。上は險阻の山續き。松の古木の枝たれて。雲なき龍かと疑はれ。下は懸崖峙つて晴れざる虹かとあやまる。ッシカッリ辨には矢間透もな。亂杭逆茂木引渡し。要害堅固に見えにける。ッシ頃しも。小春。中空や。味方の

勢の木枯に敵を木の葉と吹きちらす。武藏野の勝軍御、誇あるべしと。御寮所筑波御前まだ三歳の徳壽丸。乳母が膝にいたいけ盛り。地お傍の女中立ちかはり敵にかち栗鼠平尾布、鈍子とりく持運ぶ。お家の家老由良兵庫助信忠が妻の湊。一子女千代を乳母に抱かせ手づから捧げる島豪も。君を祝する鶴龜にやたけ心の味方の手柄。松に寄せたる御壽御前に直しフシしとやかに。御勝軍の御祝儀お目出度う存じますと。地申上ぐれば御寮所。湊が毎日の出仕大儀々々。殊にけふは勝軍の祝儀とて心の付いた上物。これまで日毎の注進に一度も悪い沙汰もなく。十一分の味方の勝。殊に一騎當千の兵庫助も跡から加勢氣遣ふ事はなけれども。地くどく思ふは女の常若しや深入りし給はんかと宜ければようて案じられる。詞イエくそこはぬからぬ私が夫勝つて

兜の緒をしめる御用心させませんと。跡から参る程なれば。殿様のお身の上夫の事に案じはなけれど。私が弟の篠塚八郎。まだ年若な氣丈者仕損じもあらうかと。こればかりが心がかり。イヤく八郎が手柄の様子。とくより委しう聞いて居る八幡での働き流石お家の四天王。伊賀守が子程あるとて。一家中の譽沙汰。ラ、よい弟を持ちやつた。アレ見や友千代があの氣丈。同年でも徳壽よりは大がらに見えるわいの。両親の血筋どちらへ似ても強からう。此若がよい片腕と地残る方なき御機嫌にハア有難いお詞ほんにそれよ。御家中の内儀連御祝儀申上げんとて。お次に控へて居られます。ラ、それは皆大儀々々はへ通せのお詞に。地お侍女中の案内にて一家中の妻女達オクリ連れへ御前へ立出づる。フシ思ひくくの。島豪や。劣らじと氣を播磨湯。君の御名も

高砂や敵をさつと掃きちらし。地首をさらへの尉と地小オクリ五十あまりの年ばいはさすが思案の底深き。井ノ彈正が妻の水木。谷の戸出づる。鶯の笠に縫ふてふ梅の花。フシ勝色見せし先陣に。心は世利田右馬之助が宿に残せし女房お鈴。言はぬど薄き唇の滞りなき口は立板に水長臺に富士の裾野の思ひ付き。フシ君の名字に仁田四郎。夫も簡れる武藏野に組んで臥猪の牙よりも。運の月形鎌倉武士。三國一の高名も時に大島長門が妻。お浪といへど浪風も治まる武功君が代は。千代に八千代にさくれ石麩の上の釣竿は。軍の先生名も高き。太公望といふ人かと。女中は寄つて其譯を土肥三郎左衛門が。比翼と契るフシ女房お辨。道其間七福神の船遊びしつかり入つた兵糧を。かつぐ布袋の。福祿壽身をかためたる毘沙門小手。蝦夷の大敵を。釣寄せてハズミ

ッシ打出の小槌。地市河五郎が勇力をしめてぬる夜の睦言はつがも内儀の名もおつがとて。家中名うてのッシばつとり者。其の外お家眠近の女房娘残りなく。皆それ／＼の掛け物廣間せましとならべ置き。勝軍の御壽お目出度う存じますと。一度に開く口紅や。づらりと並ぶ襦は。染井の鴈飛鳥の花。真間の紅葉に胡枝花寺を一つに寄せたる如くにて花々。しくぞ見えにける。御臺は御機嫌うるはしく。何れも揃うて綺麗な事。爰では皆も氣が詰らう。奥へいて緩りつと。酒でも呑んでたもやいの。友千代も寝たさうな乳母も共にの地お詞に。ハット一度に群鳥の立つや姿の柳腰。かかどりの裾長廊下オクリさゝめき連れて入る跡へ。地是ぞお留守の要石動かぬ胸のしめく。南瀬六郎宗澄出仕の上下さはやかに。黄金作の大小も流石お家の家老職と。言

はねどしるき其人品。ッシづ／＼と通る。先づ以て今日は。勝軍の御祝儀。恐悦至極と相述ぶれば。ヲ、六郎か近う近う。兵庫が行きやつて其後は。軍の知らせはまだないか。ハア相役の兵庫助申上ぐべき仔細有つて。軍の場所迄参りしかど。未だ便りもこれなしと。軍場より。兵庫殿の歸られしと。なる所へ。取次の女中立出でて。武蔵野の軍場より。兵庫殿の歸られしと。いふ間程なく。立歸る由良兵庫助信忠。積る苦勞の黒革威差詰りたる胸板や。軍出立を其儘に。ホッシを／＼として立出でしが。御座を見るより。ハア／＼とばかりに兩手つき。指附いて詞なし。地心ならねば女房湊。思ひの外早いお歸り。そして常ならぬ御顔持。御臺様のお案じ。どういふ譯かつちよつと。申上げたがよいわいなと。せけばせく程屈託。何を女の小さし出た。御諫言がお

氣に障り此兵庫を御勘當。御出馬のお供も叶はず。なま面さけて歸つたわやい。エ、御勘當とはどういふ譯。何科あつてと驚く女房。御臺所も御不審顔六郎は摺り寄つて。御諫言の其仔細は。サレバサ。勝ちに乗つたる御大將。竹澤が勧めにて。鎌倉を攻落さんと。逸切つたる御出陣。其意を得ざる御振舞ひと。申す詞も終らぬ所へ。間近く聞ゆる響の音。コハ何事と見る所に。御注進と呼ばはり呼ばはり表御門に馬乗り捨て。篠塚八郎重虎。鎧に立つ矢養毛と折掛け。眞一文字にかけ着けしが。ハットばかりに息切れし。悶絶すれば涙は駆寄りコレ／＼。氣を儲け持つたも。八郎なうと。生ける。六郎は聲高く。日頃の勇氣に似合はぬ振舞ひ。後れたるか八郎。卑怯なり重虎と。地呼ははる聲の通じてや。むつくと起されば。ナウ嬉しや氣が付いたかと。悦ぶ姉取つて突退けどつかと坐し。深手に弱る八郎ならねど。心せか

れし早打に。悶絶せしか口惜しやと。地
曲がみをなせば六郎は詰めかけく。阿
様子はいかにサ、何とく。されば候我
が君には。武藏野の御出馬より。勇みに
いさ味方の勢。我劣らじと乗抜けく
鎌倉さして攻寄する。衆衆て計りし竹澤
監物。江田ノ判官と心を合せて。阿矢口
の渡し舟底に。穴をくり明けのみを差
し今やおそしと、ヲ持つぞとは。夢にも
いざや白栗毛の駒に。鞭打ち我が君は諸
軍に先立ち駆抜けて。かの御舟に召給ふ
お供に随ふ武士は。世利田大島井彈正土
肥市河を始めとして。主従纒か十一騎え
いく聲にて押出す。固より名高き玉川
の。餘所の時雨に水かさ増り。矢を射る
ごとき川中にて。阿衆て仕組の舟子供怪
我のふりにて櫓を取落し。舟底のみを
抜き。地水中へ飛入りくハズミ行方しら
サッしくどり行く。地向ふの岸には江田

判官こなたには竹澤監物。伏勢どつと押
寄せて。射る矢は數舟には水。合たとへ
翅のあらばとて逃れがたなき御有様。天
魔を欺く我が君も。敵はじとや思しけん
鏗脱ぐ間もあら無念やと怒りの御聲諸共
に怒にあへなくヲ生害十人の人々も。
思ひく腹かき切りそこはかとなくな
り行けば。追々馳付け味方の軍勢。大將
失せさせ給ふ上は。生存へて何かせんと。
敵陣へ駆入りく一人も残らず討死と。
聞くよりハツト人々は。餘りの事に詞も
出サッ呆れ果てたるばかりなり。地一
間の内には家中の妻女。聞くに堪え兼ね
聲を上げ一度にわつと泣出す。八郎は息
つきあへず。此事お知らせ申さんと。
暫時の命ながらへて。君のお供に後れた
り。何れもさらばといふより早く咽笛
をぐつと貫きヲ息たえたり。地湊は死
骸に取付いて。コレ八郎。殿様の御遺

言。お尋ね遊ばず御用もあらうに早まつ
た此最期。コレ地なうくつと縋り付きあ
なたこなたを思ひやりかつばと。スス伏し
て。ヲ泣き居たる。地御臺所は茫然と歎
きに心空蟬のメエもぬけの如くにおはせ
しが。地漸く心や付いたりけんしをく
と立上り。乳母が膝に居眠りし若君を抱
き取り。コレ徳藤。幼けれど大將の
子。とつくりとよう聞きや。父上は敵
の爲にはかくお成りなされたわいの。
母も一所に行く程に。そなたは早う大き
う成り。敵を討つて父上の修羅の恨みを
晴したも。地官軍の總大將義貞様の孫
君。清和源氏の嫡流と生るゝ果報はあり
ながら。二人の親に別れば誰を頼りに
成人せん。母が歎きも父上の最期も夢の
すやくとしらぬ寝顔の。ヲいぢらし
やと抱きしめく落つる涙と泣聲に。御
目を覺し若君は。阿いやちやく聞かぬ

赤がほしいと。地島臺の。舟に取
付くわんぱくも。調ヲ、數ある臺の其中
で。此舟がほしいとは地船の中にて果て
給ふ。父上戀しいふ事を自然と蟲が知
らせたか。合思へば、淺聞しや。場所
も多きに船の内。前後の敵に取巻かれ水
に溺れて御生害。文彌此世からなる地獄
の責。詞さぞ御無念口惜しかる。さうと
はしらすたつた今まで祝ひさゝめく此島
臺。地舟と聞くさへ恨めしい。七福神の
富榮も。夫に別れ何かせん。鶴龜の千代
萬代齡は嘘か偽りかサハリ高砂住の江相生
の松にも夫婦はあるものを。はかなき我
が身あぢきな世の中や。祝ひは却て逆
様事。此島臺もいまほしいと取つて投げ
ほり押碎き物狂はしき風情にて。泣涕こ
がれッ伏し給ふ。地六郎も顔ふり上げ。
同此度の鎌倉攻め其意得ずとは思ひしか
ど。道にて變のあらんとまでは。思ひ設
けぬ御災難周の昭王漢を濟るに。船人ど
も是を憎み。鰐を以て船をかため。川中
に至る頃。膠湧けて船砕け。水中にて失
ひし。方便に等しき竹澤が謀。某御供す
るならば。仕様模様もあるべきに。地エ
エしなしたり口惜しやと。無念の拳手の
裏へ爪も通らん風情にて涙の玉のばらば
ら。空にしられぬ村時雨。餘所の。

見る目も哀れなり。地一間の方には女中
の聲々。御家中の内方達。君の御最期
面々の夫の別れを悲しみて皆々自害致さ
れしと。地聞いて驚く人々より御臺所は
心付き。同ハア死におくれたりさらばぞ
と。地守り刀を抜放し。自害と見ゆれば滾
は押留め。同、悲しいはお道理ながら。
今お果て遊ばしては。若君様のお身の上。
地イヤ、最早かうなる御運の末。生き
てうき目を見んよりは死なせてたもと争
ぶを。六郎双物もぎ取つて。同エ、御短

慮なる御振舞ひ。お家の事も若君の事も。
忘れての御生害ならば御勝手次第と。地呵
られて同スリヤ死ぬるにさへも死なれぬ
は。地よく。因果の此身かと歎けば滾も
諸共に。お道理様やとばかりにて。ッ
又さめんと泣居たる。地かゝる歎きの
折こそあれ物見の軍兵かけ來り。同我々
遠見致せし所。遙か向うに馬煙。數多の
軍勢此城へ押寄すると相見えたり。地御
用心候へとッ。言捨てて又引返す。地コ
へそもいかにと御驚き。兩人騒がす扱こ
そ。同竹澤が軍勢ども押寄すると覺
えたり。先づ。同奥へ御入と。地湊が介
抱漸うと。オケリ一間の内へッ入り給ふ。
地六郎は心せき。同ナニ兵庫殿。固より
無勢の此城へ。勝ちほこつたる竹澤が。
大軍を引受ける。貴殿の軍慮は何とでこ
さる。イヤ。先づ貴殿の御工夫は。此六
郎が存するには。我が君の弔ひ軍。命限

同エ、御短

命限

命限

命限

り敵を防ぎ。叶はぬ時は城を枕、討死の外思案はござらぬ。シテ又貴殿の御思案は。此兵庫が存するには。寡は衆に敵すべからず。及ばぬ事に犬死せんより。兜を脱ぎ旗を巻き。敵へ降るより外はござるまい。ム、何敵方へ降参とは。氣が違つたか狼狽へたか。イ、ヤ氣も違はず狼狽へも致さねども。所詮敵はぬ腕立てせんより。降参するが當世かと存ずる。貴殿もとくと分別あれと。地落付く程猶せき立つ六郎。ヤア分別もへちまもいらぬ。身は八つ裂になるとも。二君に仕ゆる六郎ならず。ハ、それは近頃若氣の至り。管仲は敵へ降り。霸王の助けと成りし例。ヤアなまぬるき毛唐人の引き事。今敵へ降つては御臺若君の御身の上。未來の主君へ。どの面さけて御目見えなすべきぞ。卑怯未練の畜生侍。詞を交すも身の穢れ。汝が様なる臆病者は。牛蒡程

な尾を振つて。鎌倉武士に犬つくばひ。穢でもねぶつて命を繋げと。地悪口たら。六郎はヲシ疊蹴立てて入りにけり。地何思ひけん兵庫助ずんど立つて身拵へ。奥をさして入らんとす。出合頭に女房湊。詞最前からのせり合ひを聞いて居たが。眞實お前は敵方へ。降参なされるお心かえ。ヲ、くだい。尊氏方へ降参の手土産。御臺若君引つくとつて連れて行く。地邪魔ひろぐなと突飛ばすを。起直つてしがみ付き。詞ホンニ呆れて物が言はれぬ。大事の。お主様御難儀の此時節。命限りお力になりはせで。ヲ、科なき我を勘當し。諫めを用ひすむさ。と。殺されし馬鹿大将。新田の家にあいそが盡きた。勘當請けたりや主でもなく家來でなし。イ、ヤ御勘當請けたりとて。是迄代々御知行にて。育てられたお前の體。何はともあれ是迄に。一方ならぬ御よし

み。コレ思案仕かへて下さりませと。地夫思ひの眞實心取付き敷けば。詞エ、めろ。と邪魔ひろぐなと。地突退け剣退け行かんとす。裾を押へて詞コレ持つた待たしやんせ。縦へ連添ふ夫にもせよ。お主の大事にやかへられぬ。さういふ汚穢お心なら。夫とて容赦はない。ヤア細言いはすと爰放せ。イヤ放さぬとしがみ付く。地エ、面倒など取つて組伏せ。用意の早繩手ばしかく縁柱にくりり付け。詞汝が夫を見限れば。此方にも飽き果てた。夫婦の縁もこれ限り。女房去つたと地睨み付け。ッシ一間の内へ入りにける。地ハッシ跡見送りて。女房は胸までせきくろるうき涙。けふはいかなる悪日ぞや。殿様には不慮の御最期。たつた一人の弟を殺し。頼みに思ふ夫に去られ刺へ此種目。かういふ因果な身の上が又と世にあらうかとくどき立て。どうど倒れて。泣

沈む。地大手の方には敵の大勢。四方を取巻く攻め太鼓。門をどつとぞ上げにける。地湊はすつくと立上り。阿叔は敵の寄せたるか。御臺様六郎殿。エ、此縛め解いてほしいナア。チエ恨めしい我が夫。

女ながらもお家の大事。みすく眺めて居られうか。地と命限り根限り起きつ轉んづ身をもがき。岩をも通す女の一念。阿繩にすたるゝ栢の柱。陰陽激して火を生じ。繩は燃え切れどつさと。こけても打つても厭はゞこそ地有難しと一散に奥をさしてぞ走り行く。地程なく寄せ来る敵の大將竹澤監物秀時。真先に踊り出で。鬼神と呼ばれたる義興さへ討取れば

城の奴ばら糞し一人も通さず討取れと込入らんとッシする所へ。阿降参々々と呼ははつて。地立出づる兵庫助。竹澤見るより阿ム、心得ぬ汝が降参。其手をたべる監物ならず。ハア其お疑ひ御尤も。論

より證據手引きして。此城を乗取らせ。拙者が心底見せ申さん。ム、其詞に相違なくば。尊氏公へ申上げ。恩賞は望みに任せんさりながら。降人の法なればソレ家来ども。合點と地兵庫一人を取圍み。透もあらせず亂れ入る。地湊は身がるにかいゝしく長刀小脇にかひ込んで。御臺所を先に立て。透間を見て落さんと心を配る向うより。竹澤が家の子笹目兵太。

大勢引き具しどつと押寄せ。ソレ通すなと下知すれば。心得たりと女房がくも手かくなは十文字。追立てられて敵の大勢逸足出して逃行くを。ハッ通さじやらじとッシ追うて行く。地跡に御臺はハア

後へ廻つて笹目の兵太。してやつたりと飛びかゝる。透もあらせず立歸り。斯と見るより湊が早業長刀に。血と一所に兵太が首ッシころりと落ちて死してけり。

阿サア〜申し御臺様。若君様は六郎殿がお供申せば氣遣ひない。裏道より早うと。地御臺の手を引き一散にいづくともなくッシ落ちて行く。地道具屋南瀬六郎宗澄は徳壽丸をかき抱き。上に腹帯しつかとしめ。拔身揚げ眼を配り。素肌ながらも一心の。誠は金石鐵の。たてづ

くものもあら氣の若武者。道具屋取巻く士卒を蠅虫とも。思はぬ心の大丈夫。ッシんづ〜と落ちて行く。地一間の内より高聲に。阿ヤア〜六郎。命ばかりは助けてくれん。徳壽丸を置いて行けと。地呼びかけられて六郎はきつと。後を見返れば。一間の障子さつと開き。床几にか

かりて竹澤監物。こなたには由良兵庫。鎧兜に身をかため。采配追取りいろいうとッシささいかめしき其形相。地六郎は齒がみをなし。阿チエ新田代々の此城を。朝敵の蹄にかけられ。叛逆不道の悪

人原に。乗取られしは残念や口惜しやナア。あはれ若君のお供でなくば。うぬら助け置くべきか。命実加な盜賊共。徳壽君は六郎が懐に入れ奉れば。千騎萬騎のお供も同然。道おつ開いて早通せと。

地あく迄に廣言し脇目もふらず。フシ出でて行く。ヨヤア〜者共。六郎やるな通すなど。地下知に随ふ諸軍勢右往左往に取圍むを。瘞ま守さらず切結び爰をせんとと。三度へ戦へば。地敵の大勢たまり兼ねしどろに成つて。フシ引退く。ヨヤアきたなし返せと呼ばはつて。地雷神の荒れたる勢ひ。流石の二人も底氣味悪く。奥をさして逃げ入れば。ヤア卑法至極のうづ虫めら。目に物見せんと駈寄りしが振返つてイヤ〜。地天にも地にもかげがへなき若君の御供せん。イヤ此際にと立出づる手並にこりぬ大勢が。又むら〜と追取巻く。ヨヤア性懲りなき蚊

とんぼめらと。地當るを幸ひ切立てられ。多勢を頼みの雑兵ども一度にはつと。フシ逃げちつたり。地六郎も數ヶ所の深手踏みしめ〜たり行く。城内には諸軍勢どつと上げたる凱歌を。聞くも無念と立留りしが。イヤ〜。一先づこの場を立去つて行方知れざる義峯公。御家門脇屋義治公和田桶を始めとして。官軍一味に心を合はせ。若君を守立てて時節を待つて本意を遂げ。今の恥辱をすゝがんと無念ながらも。フシ出でて行く。地阿斗を助けし趙雲が。長板坡の働きにもをささ劣らぬ其骨柄。古今獨歩の忠臣やと感ぜぬ者こそなかりけれ

第三

地東路を登り。フシ下りの街道は。武藏相模の國境。往來の足休め。よき程ヶ谷とつかの間も。たえぬ旅人の馬竹輿も。

爰に立場の茶屋が軒。地所の名さへ焼餅坂。往來の道者腰打ちかけ。コレ茶一つ下されも何時ちやぞ。イヤモウ七つ過ぎでござりましよ。ナント川崎迄行かれうかの。イヤ川崎迄は心許ない神奈川泊りと見えます。コリヤ〜太郎左。わりやタのふとり肉しめたな〜。何をいふぞい。アノおたふく。腕は松の木腰は臼泣く聲豚に似たりけりヤアいふないふなそれでも今朝立際にこそと二百なせやつた。有様はおれも約束したけれどおれが所へはうせなんだ。ムウをそで手前が焼餅か。イヤそれで思ひ出した爰の坂を焼餅坂といふげなな御亭主。イカニモ〜此坂に付いてきつう謂がござりますお話し申しましたよ。イヤ〜それ聞いてゐたら日がくれるあれ〜腹の加減も七つ過ぎ。ドリヤ茶代拂はうと。地フシ一錢二錢錢つく杖つく道者ども。フシ別れ

くゝに急ぎ行く。地又も往來の街道筋
おらが殿様はナア。姫路をとりやるナ。

そこで姫路が繁昌するといナアエ。ほ
つばらめ高が十二三貫目の荷を附けなが
ら。埒の明かぬ畜生めと。地鳴りわめく

フシ雷聲。地馬の上から湊は聲かけ。阿
コレ馬士殿私は馬にはじめて乗つた。落
ちるかと思つて怖うて怖うてどうもなら

ぬ。静かな程こつちの勝手。殊に竹輿に
召したは大切なわしが御主人。ちつとの
間も離れては氣遣ひ。此竹輿の衆はどう

ぢやぞいなう。ヲ、氣遣ひはござりませ
ぬ。東海道五十三次は言ふに及ばず。奥
街道迄を股にかけて居る此長藏。わしが

呑込んだ仕事アレゝもう爰へ見える。
ヲ、イゝ早うせやがれヤアイと。地
どやげば跡からいきせきと登り坂道。に

た山竹輿の雲助ども。肩もあたまもちぐ
はぐに。漸うと追付いて。ヲヤイゝ腰

言よ早うゝと汝は馬と人間を一つだと
思ふかやい。けふはあまり貰ひがなさに
新町の宿はづれに養殿して居たが。何す

るも錢儲けだと。願西と言合せて新町か
ら戸塚迄。百五十の駄賃かう急いで立
場で一ぱいせにやならないナア願西。ヲ

ヲじつとしてゐると寒い故荷を持つてあ
たゝまるのだ。長藏汝が雇ひぢやが何と
旦那に願うて一杯飲ませい。ヲ、サ何に

もいふな爰が泊りぢや。これゝ六兵衛
殿お泊りのお客を乗せて来た。地呼ぶ
に亭主が走り出で。サアゝ是へと店先

へ。湊をフシ馬より抱きおろせば。阿ヲ
ヲ思ひの外早い來様。跡の宿から二里に
は近い。モウ爰が戸塚とやらいふ所かえ。

イヤ爰はといふを打消す腰言の長藏。ヤ
コレ成程々々爰が戸塚の宿。ノ御亭主と
目で知らすれば亭主も然者。いかにも爰

が戸塚でござります。そしてお連は。イ

ヤ連といふは私が主人。地サアゝ是へ
と昇寄せさせ。いざ御出でと介抱に。義
興の御意筑波御前。オケシ習はぬ旅に身も

やつれ。スエテ立出で給ふ御姿。葦屋の軒
に三ヶ月の。みがかれフシ出づる其風情。
地長藏は現をぬかし。阿何と二人共に見

たか。旅やつれでもあの器量。旅籠屋の
ふんばりどもとは。伽羅と甘藷程遠つて
美しいもんではないか。あんな物を抱い

て寝る男めは憎い奴ぢやないかいやい。
コリヤ長藏わりや何ぼ所の名ぢやとてい
らぬ焼餅だな。そして棧外れといひ物で

しといひ。先づお前方はどこからどれへ
行かしやりますと。地問はれて湊が阿イ
ヤわれゝは武藏の者。地頼みしお方の

御病氣故。箱根へ湯治に参る者と。フシ言
紛らして。阿コレ主のお方。奥へ参つて

も苦しからずばあの一問へ成程々々御念
に及ばぬサアゝ是へと。地亭主が

案内湊も詞そこ／＼に一間のヲシ内へ入る跡に。願西は大欠伸。詞ヤレ／＼草臥れたく。コリヤ長祓わりや爰を戸塚だとして女を扱し。爰に留めたは何ぞうまい仕事があるか。他人にせずと半口のせぬかなア野中よ。ヲ、それ／＼戸塚迄行くを爰で仕舞ふ仕事故。だまつては居たが何ぞ之には譯があらう聞かせいやい。イヤサ譯というて高がかうだ。あの竹輿に乗せて来た女に我等首だけ。供といふも女の事。今宵中に一太刀言はせたい思入れ。それで戸塚は入込みの旅人。聲山立てても遠慮のない様に此立場の雲助宿を戸塚の宿だと欺して連れて来たのだ。何と智恵か／＼と地うぬ惚のヲシだみそは鼻に顯はれたり。願西手を打ち扱もしたり。詞戀の智恵は又格別。おれは又あの供の女久しぶりの女犯肉食。フウわれも其心かサア二人ながら相談はきまつ

た／＼コリヤ野中よわりや何とする。イヤおりや女より一ぱいやつてぐつと寐たい。そんなら前祝ひに一ぱいづつ己がもめるサアこいと。地山も見えざるそら祝ひ。實に長はんが當飲や、ヲシ咽を。ならして入りにけり。ハルヲシ御痛はしや。筑波御前。要具見るもいぶせき薬やの軒。湊は障子押明けて。暫く是にて旅の變はらさせ給へと、ヲシ勸むれば。地御臺は思ひの顔を上げ、ナウ湊自らが身の上程。世にあちきないものはなし。地二世と連添ふ我が夫は思ひ設けぬ御最期。いとし可愛の我が子には生別れ。惜しからぬ命ながらへしも。何卒徳壽を世に立てんと。それを頼みに此艱難。そなたのいかい心遣ひ。あかぬ別れを忠義にかへ。詞男勝りのかひがひしく。長の旅路の介抱。若し煩ひでも仕やらうかと。も思ひ過して悲しいと。跡は涙に詞さへ曇り。がちな

るヲシ御顔ばせ。地ともに悲しき。涙を隠し詞これはマアお心弱い其様に思召して長の旅がなりませうか。義治様へお前を手渡しするまでは。めつたに風も引く事ちやござりませぬ。私が夫兵庫助。思ひも寄らぬ二心ゆる夫を捨ててお前のお供。又南瀬六郎殿は若君を御介抱。何卒尋ね逢うたなら仕様もやうもござりませう。暫しの間のお艱難。必ずきなく思召さぬがようござりますと。地口にはいへど心には。是が新田の。奥方の。お有様かと、エ打ちしをれ。タ、キ見かはす顔の花曇り。上見ぬ鷺や鷓鴣。寝鳥さゝんと寝言の長賊。願西が二人連れにて、詞奥より立出で。詞若し女中様さぞお勞れでござりませうと、地いふに泣顔隠し。詞そなたはさつきの二人の衆。何ぞ用ばしあつての事か。アイ用といへば用様なものナア願西。ヲ、ちつとお前方

にアノナアノ。コリヤ〜長藏おれには
かり言はせずと汝もいへ。ハテマアあた
ま役ぢやわれからいへ。イヤわれから。
われからわれからわれから。ム、二人共
に旨ひにくいといふは。酒でも飲みたい
故價をくれといふことかアイまあそんな
事もよごんしよ。がちつと御無心がごは
ります。シテ又外に無心とは。アイお大
事物ではあろけれど。お二人ながらア
ノわしら二人を今宵一夜抱いて寝て。乳
を飲ませて下さりませ。エ、アイ出家
一人お助けなさるはいかい功德でござり
ます。跡にも先にもたつた二人。どうぞ
取らせてやつて下ありませと。地思ひが
けなき一言に。御臺はとかう詞もなく。
ぞつと、ッシこはげの胸震ひ。地湊も聞い
て悔りの驚く胸を押ししづめ。弱みを見
せじと膝立て直し。イヤア身の程しらぬ
慮外者。女子ぢやと思つてなぶつたらあ

てが違ふ。長の旅を女の身で主人の介抱
覚えがなうてなるものか。殊に歴とした
武士の妻。今一言いふと赦さぬぞと。地
尖き詞に長藏は。阿へ、何と聞いた
かこはい事だないかいやいさう強う出や
りやこつちも意地。言ひかゝつた色事。
コレよう聞かしやれ。戸塚の宿と欺して
留めたはおれが思ひを晴らさうばかり。
爰は武藏相模の國境、鳩餅坂といふ立場。
一里四方に此家たつた一軒。泣いても詫
びても外に人は一人もないナア願西よ。
ヲ、さうだ是非いやだといやりや引縛つ
て抱いて寝る。サアどうだ地どうだと二
人して。戀の手詰めの居働。聞く程つ
らき身の難儀。通れがたなき一世の瀧湊
は思案し笑顔を作り。阿ハテそれ程に迄
思つて下さるお心を。何の仇になるもの
ぞ。私らも長旅の獨寐有様はこつちから。
ヤア〜それは夢ではないか又ある格の

嘘ではないか。サア誠は寝て知れる
と。地中叩けばぐにや〜〜〜阿サ
アさつぱりと埒明いた。此長藏は近飢手
附にちよつと口々、ッシがり付くを。
地湊は押留め。阿あなたも私も顔見合せ
てはどうも恥しい。互に見えぬ様に目を
ふさぎ、めんないちどりかけてなら。イヤ
モウどうなりと君の仰せは背きやせぬ。
幸ひ爰に幌巾が。おつとよし〜。わし
がする様にならんせと。地幌巾取つて二
人共。湊が手早くめんないちどり引きし
め〜。サア〜。是からこつちも目隠
しする。用意の内見まいぞと。いへば二
人が合點だ。支度よくばしらせてと。心
はもぬけのから衣きつ。馴れにし襦引
上げ。湊は御臺に目くばせし。早う〜
の目遣ひに毒蛇の口や門口を。抜けて御
臺の御手を取り。こけつまるびつ漸うと
行方。しらす、ッシ落ち給ふ。文通、跡に二

人は夢現。目サア〜女中様早う寢た。聲のせぬはおもたせぶりか。ソリヤ難面いぞえ難面いぞえ。願西よどこに居るぞ。

最前からだまつてゐるはわりやきまつたなく。何を言ふぞいやい。さつきにから首搜しにさぐつても知れぬぞよ。ヤア

汝もさうかおれも知れぬ。あた面倒なと地枕巾かなぐり、ッ傍を見廻し、目サア

〜女めはうせぬか。エ、腹の立つ撮まれた遠くは行かじぼつかけよ。地ヲ、合

點とかけ出す向うへ。竹澤監物が家來犬伏官藏。主の權威を鼻にかけ供人、引

連れ歩み来る。地所の名主が先に立ち。目これ〜亭主何か御詮議者があるとして

人吟味。泊りの衆も皆これへと。地いふに亭主が罷り出で。目イヤ私が所は雲助

宿御氣遣ひな者は一人もござりませぬと地聞くより官藏ぐつとねめ付け。目ヤイ

〜其雲助が猶不審。此度新田義興の家

來南潮六郎といふ者。義興の棹を連れ此邊を徘徊するよし。依つて宿々の旅籠屋を人改め。己が内の泊り人殘らず是へ呼

出せ。先づこゝに居る坊主め。合點が行かぬ汝は何故其さま。マア生國はいづく

の者と。地問はれて願西錫杖振立て。三下り聲奇妙頂來のら如來。目抑もわつ

ちが國は上州。幼い時から穴一小博突。色事覚えて十四で勘當寺へ駈込み和尙の

大黒盗んで駈落ち。商ひ知らねば喰込みばかり。女房ぐるみに博突に打込みそれ

にもこりずに年増にはまつて盆ごさぐるめに。くるむき裸に坊主にされた。さり

とは〜うるさいこんだにヨウ。脱敷次は。盲目の伊勢参り。襷片手に聲張上げ。

目奥州仙臺お伊勢様へ。三十三度参りの盲目に御報謝。ヤア汝らが様などう盲目

に。詮議はないとつととうせいときめ付けられ。ノリ詮議がないとはありがたい。

只今のお心ざし。伊勢太神官様へ上げますでござります。まめ〜〜延命によろお守りなされて下さりませホ、ホ、ハズぼう〜、ッ急ぎ出でて行

く。無頼さて其次へ出てくるは。是は戸塚の名代物。合言はねど皆様御存じの。

狸の。器西。鼓にあらぬた〜き鉦。撞木杖つき漸うとッ表をさして出でて行く。

次は差詰め。野中の松。アノ私は元角力好き。ア、角力と言ふ物はしやう事も

ない物。大きにけがを致しましたそれでも角力取るならかうエイ。エイ〜。何

の事だ。こいつは〜。汝はコリヤ氣遣ひだな。エ、役にも立たぬ奴等に隙取つ

た。併し只今申し渡した。南潮六郎見付け次第搦め取つて此官藏が旅宿へ連れ來

れ。褒美は望み次第。ヤア百姓ども次の宿へ案内せよ。地早う〜と言渡し。皆々

引連れ、ッ急ぎ行く。地跡に長藏一人笑

み何と聞いたか二人の者。さつきに跡の松原でがんばつて置いた金の莖。褒美は分取り奥でとつくり相談せう。地サアこい〜と三人はオウリ打連れへ奥に入りけり。地既に其日も入相の。フシ鐘の響も。おのづから寂滅。爲樂も。西の空。地願ふは彌陀の誓願力。六十六部廻國に妾を暗す南潮六郎。忠義は重き笈の中錫杖つく〜立留り。實に春の日の長きといへど。急がぬ旅のあてどなし。同日が暮れうが夜が明けうが高が野宿の此身の上暫くつかれを晴さんと。地笈をおろして傍なる榜示杖打詠め。同フウ何々是より東武藏の國。是より西。相模の國。扱は妾こそ武藏相模の國境と。地四方を見廻し。笈の戸を明けて、フシ四つの稚子を。地義興の若君徳壽丸。同サア誰もをりませぬ御心よう御遊びと。地道の邊の花折取り妾迄ござれ此花しんじよ。サア〜御出でと膝に乗せ撫でつさすりつ六

郎が機嫌取り〜道野邊の。草に露吸ふ蝶々の夢ともわかぬ稚子の餘念はさらに。フシなかりけり。地せめて是へと榜示杖引抜いて押直し。若君を抱きのせ御顔つく〜打守り。目にもる涙押し隠し。果報はいみじく源氏の正統。新田義興公の公達と生れ給へども。足利尊氏に世をせばめられ。機の笈に御身を隠し。お乳の人にも。傳にも付添ふ者は某一人。地かく淺ましき御身の上弓矢神にも。天道にも見離されしか残念やと。拳を握り齒がみをなし。スエ無念の涙に沈みしが。フシさりながら。同幼けれど源家の公達。此六郎が申す事。能うお聞きなされや。今御足の下なる榜示杖は。武藏相模兩國の境杖。尊氏は相模の國鎌倉に居を構ゆれば。時に取つての足利尊氏。武藏の國は今敵竹澤監物が領分。二人が軍勢踏破り。武藏相模を一時に踏隨へ給ふべき前表。地それを祝せし我が寸志追付け尊氏討亡

し。目出度く御代に願へさんと祝ひ。フシ悦ぶ折こそあれ。地いつの間にかは寐言の長藏。南無三寶と若君を。手早く笈に抱き入れあたふたしめる兩方より。同じく願西野中の松三人一所に。フシ追取り巻く。地中にも寐言の長藏が。同コレ六部殿。行暮らしたる追刺ちや御報謝に預りたい。ホウ心安い事ながら。此方も人の情を受けて通る修行の身。貯へとは更になしと。地半分言はせず。同ヤア貯へがあらるとも高の知れた六部の路金。大金になる其笈が貰ひたい。ムウ此笈がほしいとは。コリヤ常の盜賊でもあるまい。早速やらうと言ひたけれどマアならぬ。ヤア甘ういへば付き上る。どうで直ぐではいかぬ奴二人とも合點か。ヲ、合點と地兩方から。組付く首筋引掴み。同右と左へもんどり打たせ。寐言が透さず後より。しつかと抱くを腰車。ヤア合面倒なる甕廻めら。此世の暇を取らせんと。地錫杖

に仕込みし刀引抜き切拂ふ。こなたは刃物敵はじと。見世の道具の手に當る。茶碗盃たばこ盆投付けく三度打付くる。地切拂ひ切拂ふ劍の下に野中の松。此世の枝葉は枯れうせたり。地願西も手は負ひぬ。長藏有合ふ庖丁追取り立ち向へど。手練の六郎敵はじと持つたる出刀を投付くればあやまたず。六郎が膝の口へすつばと立つよろくとたじろく中。いづくともなく逃げうせたり。地六郎は齒がみをなし。エ、討ちもらせしか口惜しやと。庖丁抜き捨て下着の裾引裂いてしつかと巻き。取逃せしは残念なれど。大事の若君の御身の上が大切と。地痛手につくせす踏みしめ。歩めどちがく足曳の。山坂に氣を春の夜の。そことも分かぬ宵闇にたどり行くこそ。三更是非なけれ。地由良兵庫助信忠は二張の弓も引きかたの。竹澤が推擧にて尊氏卿へ仕官へ。新たに所領賜りて不義の富貴のそれ

ぞとも。しらぬ我が身の程ヶ谷や十塚の宿に隣りたる。所の名さへ吉田村傍に目立つ。一構へ。手を盡したる物好きの。オクリ庭に。泉水築山の木々の梢を漏出づる。朧月夜に映ひし。木ヲシ櫻が枝の白妙も浮べる。フシ雲とや詠むらん。地鎌倉よりの召に依りて主兵庫が留守の内。呵人のない腰元ども。乳母交りにどつたいた。サア若子様のお馬が通るヘインイドウ。地高嘶き。まだぐわんげなき友千代を。抱き乗せたる四つ這ひの。生れ付いたる棚尻。びこつかせてフシかけ廻れば。地ナウあぶなやと抱きおろし。コレ皆の衆。旦那様のお留守ちやとてやりばなしに騒がしやるな。若子様をだしにして面々の慰み半分。怪我させましたらどうしなさる。そしてマアあらう事か。大きな聲を振廻して。お鍋殿もお鍋殿。イヤコレ人の七難より我が八難。お乳母殿のおゐんどちやとて。餘り小さうもござんす

まい。なんばわつちが棚尻でも。見かけに似す上つてあると。どなたでも覺めなされるよ。ナウお松殿。さうぢやないか。ホ、上つたの下つたのとは。子供の上げる麻巾ぢやあるまいし。イヤコレく其鯨魚は少と差合ひぢやと。地どつと。笑笑へば。イヤコレ若子様の今すや。大きな聲よして下され。ほんに愛らしいお子ではあるぞ。サイナ此お子産んだ母御が見たい。サレバインノ奥様のない此お屋形。實は身の差合せ。寡暮しの旦那様に。わつちが鯨魚で吸付いたら。身も同然に相果てると。おつしやるであらぞいの。アノお鍋殿とした事が。旦那様は石部金吉。女護が島へやつて置いても氣遣ひの氣の字もない。イエくく口先でちよびくさいふより。えて堅氣めがしつ深な。必ず油断さししやるなと。地三つ寄すれば姦しい。フシ目口乾きの色咄。地折から旦那お歸りと下部が呼次ぐ聲に連

れ。ソリヤ野郎かばへて呵られな。イザ若子様も御一所にと。皆打連れて、フッ入りける。地館の主兵庫助信忠。江田判官景連を同道にて。立歸る。我が家の内。地イザ先づあれへと賓主の禮。上座に直つて江田判官。爾先づ以て今日は御前の首尾も上々吉。此判官も去年の冬。さしも手強き新田義興。手もぬらさず討取りしは。莫大の勳功と。尊氏公御感の餘り相模半國を賜り。此上もなき悦び。貴殿は固より義興が舊臣。お疑ひもあらんかと思ひの外のお取立て。ハア御意の通り。此兵庫助新田の家を見限り足利家へ降参。當時かやうの活計も。貴公と竹澤殿のお執成。御芳志の程言語には述べられずと。地婿詰ひの挨拶に。判官猶も近く差寄り。爾それに付き義興が弟義岑。又悻徳壽丸。今において行方知れず。少しにてても手がかりあらば。古主とて容赦

召されな。ハアイヤ其御念には及ばぬ事。死損ひの新田の類。地掘り殺すに手間隙いらす。それはさうと判官殿。今宵も最早初夜過ぎなれば。見苦しくとも奥の間で。地夜と共のお物語。イヤイヤ拙者も急ぎの道。先づ今晚は御暇申さう。ハテサテそれは残念千萬。イヤ我等領分より鎌倉への往來には。丁度よい中休み。以後は一寸々々と御尋ね申さう。然らば其内おさらばと。地家來引連れ判官は、己が館へ立歸る。地世をうき草のよるべき、義興の御臺筑波御前湊一人を、力にて。しらぬ。夜道を。とぼくと。門外にたどり着き。爾道踏み迷ひし旅の女。地一夜の御宿といふ聲のほの聞ゆれば内には不審。地手燭携へ、地歩み寄り。地互に見合す類と類。思ひがけなき悔りに兵庫は流石面ぶせ。入らんとするを女房は。つかくと立寄つて胸づ

くし取つて引きす。爾コレ爰な人でなし殿。落人と成り給ふ。御臺様のごのお姿。さぞ本望でござんしやう。お前的心一つにて。さまざまの御艱難。けふ迄お命續きしは。地まだしも神佛の控へ綱。世を忍ぶ旅なれば何か付けて不自由がち。御臺様のお足の痛此家作りの結構さ一夜の無心と来て見れば。どうかおまへの内さうな。地かゝる暮しでありながらお主の事も女房の事も。忘れ果てたる無得心。爾エ義理しらすと道しらすと意見いふも好説だけ。どうぞ本心に立歸りお家の御先途見届けて。是迄の恥をすゝき。元の女夫に成つてたべ。憎い〜と日頃の恨み己やれと。思うて居たが顔見れば。地心が味になつて来て。恨みも漸う百分一。爾友千代は息災なか。流行風邪など引きはせぬか。かういふ暮しでござるからは。コレ申し。お内儀様を呼び

やなされぬかいな。どうぞ。いうて。聞かせて下されと強い様で女氣の。しとげ、ッ、涙にくれ居たる。御臺も漸う顔を上げ。殿様には不慮の御最期。頼みに思ふそなたさへ尊氏へ降参。徳壽を連れて立退きし六郎が行方知れねば。そこや、爰やと尋ねても行く先々が敵の中。東の住戸はねば。脇屋義治殿を頼みにして上方へ志し。迷ひ來たるも盡きせぬ機縁。習はぬ旅につかれ果て。置所なき露の身の。消えなば消えぬ鬼も角も。よきに頼むと、ッ、ばかりにて跡は。詞もないじやくり。詞、ホ、いたはしき御有様。お力にと申したいがマアならぬ。昔は昔今は。足利家の祿を食ひ此兵庫。新田方の落人、搦め捕る筈なれども。女儀の事なりや料簡して。見送いて進ぜう。足元の明い中とつと、ござれと、ッ、にべなき詞。女房は猶せき上げ。詞、エ、聞けば聞く程

あいそづかし。コレ飼養ふ犬も主を知り。尾を振つてそばえるものを。犬に劣つた人畜生。サア御臺様お立ち遊ばせ。行き着き次第に参じませう。ヲ、時世につるゝ人心。是非もなき世の有様と。しをくとして、ッ、立給へば。心づよくは言ひながら。流石女の跡や先笑顔。作つて傍に寄り。コレ兵庫殿言ひがかりに言ひはいうたが。アレ御臺様のお足の痛み。殊に夜更けて一寸も。おひろひはなされまい。座敷にならずば軒の下。木部屋になりともたつた一夜を。イヤならぬ。そんならどうぞ友千代に。ちよつと逢はせて猶ならぬ。夫婦でなければ子でもなし。とつと、うせうと荒けなき。詞に湊は身を震はし。詞、エ、御臺様のお供でなくば。喰付いても此恨み。人に報いがあるものかないものか。覺えてござれと見返り。御臺所の御手を引き。す

ごくとして。ッ、シカ、リ出でて行く。オカリ心ぞへ思ひやられたり。されば其餘推るゝ時は枝葉全からずとかや。南瀬六郎宗澄は數多の追手を切抜けて。忠義一圓に若君をやうく背に笈の内。深手に弱る足たち。此家を目前で。ッ、よろぼひ來り。行暮せし旅人なるが。盜賊に出合ひ難儀至極。お家を見かけお頼み申す。御かくまひ下されよと。地内へはいれば。詞、ヤア其方は南瀬六郎。ム、人非人の由良兵庫。ハレ思ひがけなき對面ぢやナア。愚人に向ひ詞はなし。サアサア、勝負と詰めかくれば。詞、ハ、ハ、ハ、血迷うたるか六郎。イヤ存外の謔言。所詮助からぬ我が命。汝が首を冥土の土産。ム、ハ、ハ、血迷うたとはその事。ナント。尊氏公の御威勢見たか。唐土天然はいざしらす。日本の地に在りては。いか程遁れ隠るゝとも。袋の物を探るに等しく終

には尋ね出されん。そこを計つて此兵庫。手短かに降参し一廉の知行を取れば。コリヤ此通り豊の暮し。かの蟻螂といふ蟲は。己が斧を頼みにして車に向ふまつ其ごとく。汝が武勇を頼みにして。鎌倉へ弓引かんとは淺はかな料簡。大きな物には吞まれ。長い物には巻かれるといふ諺の通り。たとへいか程働いても御威勢にて取圍めば。行先々が皆敵。其上にソレ其深手。手向ひはおぼつかない。ヤア道知らずがぬかしたり瓦と成つて全からんよ。玉と成つて砕けよとは古人の金言。身は醜になるとても。汝が如き不忠不義恩を忘るゝ六郎ならず。ホ、其理窟は聞えたが。今某が討果さば。ソレ其爰の内なる徳壽丸、誰あつて介抱するぞ。サとつくりと分別せよと。地星を差したる一言に。詞イヤサどうで通れぬ御命。但しは汝善心に飄り。かくまひ申す所存な

るか。イ、ヤかくまふ程なりや鎌倉へ降参はせぬわやい。かくまひもせず。本心にも返らねども。高のしれた小倅一匹。鎌倉殿の害にもならねば。見遣してやる分の事さ。ム、しかと見通してくれうや。窮島樓に入る時は獵人も是を取らず。ハア忝い。地命惜むにあらねども。御一門は皆ちりく。義孝公は御行方知れず。新田の家の御血筋残り給ふは若君ばかり。御大切の御命見のがしてさへ下さるれば。御恩は忘れぬ。コレ手を合して拜み申すと地ゆだんを見すまし近寄つて。只一討と切付くるを。騒がず鏑にてしつかと請け。ム、とても及ばぬほどでんがう。其手では参るまい。さりながら。木にも萱にも心置くは落人のならひ。疑ひは尤も至極。コリヤ見遁すといふ其證と金打し。深手の上に氣をもますと。お

くの一間で養生お仕やれ。へエ天に歸り地にぬき足。思慮分別も愚に返り。かくなり下る我が身の上。地弓矢の冥加につきたるか。くらむ心を取直し。心ならねどぞひなくも。オクリ奥のへ一間にたどり行く。フシ程もあらせず。地討手の大勢ばら／＼と亂れ入り。矢ぶすま作つて追取巻く。コハ何ゆゑの狼藉と言はせも果てず捕手の頭。新田の小倅徳壽丸。南潮六郎を付込んだり御渡しあれとのしれば。地人数の中より馬士の。寝言の長祇ぬつと出で。コレ親方。金に成る代物を焼餅坂で取り逃し。追手の衆の手に餘れば。どうでおいらが手ぎはにやおえないと。見えがくれに付けて來て。おくへ入つたをとつくりと見て置いた。四の五のなしに渡さつしやれ。渡せ。地渡せと大勢がすきもあらせず詰めかける。折もこそあれ表の方。地上使なりと

呼ばはつて。入来る竹澤監物。詞ヤア家
來共龜忽の振舞ひ。皆引け。地く〜と追
退け。フシ上座に通れば。詞ム、思ひがけ
なき御上使とは。ホ、上使の趣き餘の儀
ならず。南潮六郎徳壽丸。最前道にて討
ちもらせしと追々の注進。尊氏公聞し召
され。元來古主の事なれば。兵庫が心底
計りがたし。吟味せよとの嚴命。早打ち
にてかけ付けしに。案の如く貴殿隠し置
く條まぎれなし。昔のよしみにかくまふ
や。又首討つて出さるゝや手みじかの一
口商ひ。返答いかにと問ひかくれば。地
兵庫は何のいらへもなく。傍に有合ふ弓
と矢追取り。きり〜と引きしぼり。一
間を自當てに切つて放せば過たず。はつ
しと手ごたへ血煙とともに障子を踏み脱
し。朱に成つて南潮六郎。詞ヤア単性至
極の表裏者。あまき詞に我を欺き。飛道具
にてしとめんとはや愚か〜。是式のへ

ろ〜矢。百筋千筋身に立つとも。何程
の事あらん。類を以て友とする。奸佞邪
智の愚人輩。一々首をならべんと。地無
二無三に切つてかゝる。心得たりと兵庫
助。請けつ流しつ上段下段。鋭き太刀筋
こなたは手負ひ。心はやたけに逸れども
切込む亦をうけはづし。左の肩先切付け
られかつばと伏せば。わつと泣く。若君
ばひ取る兵庫が早速。むつくと起きて六
郎が。やらじと縋るを又一太刀。うんと
のつけにそり返るを。見向きもやらす若
君の首ちうに打落し。フシ檢使の前に差
置けば。地竹澤につこと笑を含み。詞兼
て知つたる貴殿の心底。疑ふ筈はなけれ
ども。徳壽丸が面體を見しらざる此監物。
燒鳥に捉緒。念の爲誰ぞ見知りし者やあ
る罷出でよといふ聲に。地以前の馬士お
づ〜はひ出で。首をとつくと見改め。

詞今日道にて見付けし悴に。相違はござ
りませぬ。ホ、是にて萬事相濟んだり。
尊氏公へ申し上げなばさぞ御悦喜。褒美
は追つて御沙汰あらんと立上れば。ハア
何分にも御前宜敷く。近頃御苦勞千萬と
地五のあいさつ竹澤監物首取り。フシ持
たせ立歸る。地フシ此家の騒ぎ。地若君の
御身の上と聞くよりも。あるにもあられ
ず御臺所。湊が介抱漸うと道よりも引つ
かへし走り。蹶く氣は狂亂。詞徳壽はい
かゞ。若君様。六郎殿はいづくにと。地
うろ〜きよろ〜。兵庫にばつたり。詞
ム、コリヤ何ぢや。徳壽丸にあひたいか
逢ひたくば逢はせてやらうと。地投出す
は首なき死骸。二人ははつと氣も顛倒。
詞スリヤもう若は殺されたか。地コハ何
とせん悲しやと死骸に。スエテ取付き泣沈
む。湊は身震ひはがみをなし。詞へエ鬼
とも蛇とも魔王とも。名付け様のない悪
人。コレ申し御臺様。所詮いうても返ら

ぬ事。サアお覺悟遊ばしませ。地ヲ、いふにや及ぶと用意の懐籠。兩方より突きかゝる。ヤア及ばぬちよこさいひろぐなと。腕首挿んで突飛ばせば。又突きかゝる一念力。あしらひ兼ねてや兵庫之助。フシ一間をさして逃入つたり。阿ノリヤア逃ぐるるとて逃がさうかと。地飛込む襖の小陰より寝言の長藏躍り出で。阿こんな事もあらうかと跡に残つた甲斐あつて。重ね／＼褒美の種。此趣を注進と。地言捨てかけ出す。後の障子の隙間よりはつしと打つたる手裏劍に。フシぎやつとはかりに息絶えたり。地コハ何者の仕業ぞと。見やる一間に聲高く。阿官軍の御大將。新田左兵衛、佐義興公の御嫡男徳壽丸。御安體にて渡らせ給ふ御安堵あれと呼ははつて。地傳き出づる兵庫之助。見るより二人は夢に夢。阿ヤア徳壽丸は存へてか。若君様にてましますかと。地抱き

取つたは煎豆に花の笑顔のにこ／＼を。見る目ぞく／＼嬉しさは。フシ何に譬へん方もなし。地女房はつと心付き。阿若君様を助けるとは思ひがけなきお前の忠義。嗚かし深い方便でがなごさんせう。したが最前竹澤とやらに首切つて渡した。何人の子でござんした。ホ、それこそ伴友千代。ヤアスリヤ此死骸が我が子か。地ハアはつとばかりにどうど伏しスエ前後。不覺に泣出す。御臺所も御涙。地我身の上引代へて。夫婦の心根思ひやる。いかに主の爲ぢやとて。我が子を殺して此若を助けてくれる志。阿家來ではなく。氏神とも命の親とも。今更に禮はフシ詞に。盡されず。阿そしてマアいつの間にか千代と取代へて此子を助けた其譚が。ホ、其仔細は六郎が申上げんと起直れば。地思ひがけなく又悔り。阿ヤア殺されたと思ひしそなた。ハイヤ此六郎

は豫てより。命を捨てての謀。ホ、忠義はかはらぬ此兵庫。善惡二つに引分かれし地一通り。フシ御物語。阿扱も我が君義興公。朝敵を亡せよと勅命を頭に戴き。必死と定めし御出陣。續く強者六萬餘騎。敵は名におふ足利尊氏。隨ふ軍勢十萬餘騎。地兩陣互にいどみ戦ふ。さしに廣き武藏野の草より。出でて草に入る。オノリ優しき眺めに引代へて。月に縁ある弓張や射る矢亂れて篠芒。枯野の草を踏越えく。互に恥ある源氏と源氏。天下分けめの晴軍。組んづ。組まれつ討つつ討たれつ。矢叫びの音鯨波。修羅の街に異ならず。元來猛き御大將。追つつまくつつ數箇度の軍。さしもの尊氏敗軍にて鎌倉フシとして引退く。虎にも乗るべき御勢ひ。竹澤が勧めにて。跡より追つかけて討取らん續けや／＼と乗出し給ふ。阿、其勝軍が我が夫の御身の仇

で有つたわいの。イエ〜いか程はやらせ給ふとも。無理に御留め申しなばアイヤそこに如才ごうさいのあるべきか。抜目なき兵庫殿。さま〜お諫め申されても。

勝に乗つたる御大將。御承引ごしやういんまします。諫むるを曲事まがこととて御勘當。ヲ、主従取の印いんとて授付け給ひしコレ。此屬。跡にて見れば御書置。朝廷には佞人ねいじん多く君を惑し率り。我が謀を用ひざれば思ふ軍の圖をはづし。見苦しき負けをせば。我のみならず先祖へ對し。新田の名字をけがさんより。深く討死せん。汝は跡に生残り六郎と心を合せ。俣を守立てくれよとある。コレ細々ここことの御筆すさみ。地様々御諫め申せども。聞入れ給はぬ日頃の御氣質。力及ばずすごとく。羽なき鳥の心地にて。是非なく、フシ故郷へ立歸り。地思案の間もなく竹澤と。江田の判官が謀計めがけにて。矢口の泡ときえ給ふ。名ある家の

子郎等は悉く討死し。守りがたき新田の城。落城に及びなば若君の御行方。草を分つて探すは必定。とやせんかくやと火急ふよの思案。阿昔唐土趙の國に稱嬰しやうえい杵臼しゆいといふ二人の臣下。主の孤兒を助けんと。

敵を計りし故事を思出して相談極め。ヲ若君と取代へて立退いたるは此六郎。ヲ、サ我は敵へ裏返り。密に若君御養育。それとはしらず御臺様。地燒野の雉子夜の鶴。子故に迷ふ御旅づかれ。最前入らせ給ひし時。阿わざとつれなくもてなせしも若しや敵へ洩れんかと。思ひ過しは若君の御身の爲と思召し。御容赦なされ下さるべしと。地始終詳しき物語初めて明かす本心の智略の。程ぞ類ひなき。仔細を聞いて人々の。うたがひ晴れても晴れ遣らぬ。フシ涙は瀧を争へり。地六郎は座を固め落ちたる刀取上げて。腹にぐつと突立つる。コハ何故の生害と、メ驚

き。すがればにつこと笑ひ。阿ハア心よや嬉しやなア。助かりがたき若君のお命助け率り。御臺様へお渡し申せば。思ひ置く事微塵もなし。地我が命ながらへては。邪智深き鎌倉武士。兵庫殿を疑はゞ若君の御身の大事。殊に數ヶ所の此手にて。助かるべきいはれなし。阿兼て落城

の折柄。友千代を殺させて敵に油斷させんと。約束にて立退きしが。いかに忠義といへばとて。一人の我が子をつき出して。我に渡した兵庫殿の心根を。思ひ計つて惜しからぬ。命をかばひ方々に身を忍び。そこや爰やのもらひ乳も。落人の身の心に任せず。東西分かぬ稚子の。餓ゆれば泣出すやんちや聲。飯の取湯や地黃煎で。だましすかして漸うと。なつく程猶いちらしさ。我を親とも乳母とも。起きふしの上げ下げにも。伯父よ〜と

を探つて泣出し。かゝア／＼といふ時は。子を
持たぬ身も骨身にこたへ。地無かし親の心
では。夜の目も合はず慕ふらん。何ぞぞ手
渡しせんものと。漸うこなたの在所を聞
出し。忍び来る道追手に出合ひ。去年の深
手に不自由のからだ。又ぞや深手を負ひな
がら。何とぞこなたに一目見せ。其上はと
もかくもと此家へ辿り着きしかど。跡より
慕ふ不敵の曲者。悟られては一大事と。そ
れ故にしみ／＼と。地顔を見せざる残念さ
と。語るを聞いて女房は。不便の者やいぢ
らしや。何久しう連添ふ夫婦の中。子の
ない事を苦にやんで。持薬よ灸よ湯治よ
と。様々の心遣ひ。夫にかくして佛神に
立願祈願の効あつて。やう／＼産んだ友
千代丸。抱瘡癩疹もして取れば。最早
樂ぢやと悦んで。袴着寺入り讀物は。何
からどうして斯うしてと。案じて居たも
皆むだ事。三つや

四つで死ぬるなら。生まぬがましであつたかと。地譯も涙に取り亂し消え入る。エエばかりに泣きしづむ。兵庫は態と聲はげまし。何とくにも死すべき悍が命。けふ迄もながらへしはまだしもの仕合せ。泣くな女房日頃に似ぬ卑怯者。エ、未練しごとくと地しかられて。女房は猶しやくり上げ。何お役に立つて死ぬる命。合点づくなら泣きもせまい。思切り様もあらうけれど。地お前一人の料簡で。わたしにはつゆ知らさず。何殺して置いて今になつて。卑怯な泣くな



未練などは、いかに男のかうけぢやとて。我儘いふも事による。地むこい、わいのと打ち、ッシ伏して又さめ、くゝと泣き居たる。詞アイヤ其恨みはさる事ながらお家の密事。天下の大事。女童に打明ける兵庫ならず。とはいふ物のいかに計略なればとて。地朋友の六郎に手を負ふせ。詞久しぶりて逢うた悴をもぎ取つて。只一討ち。知らぬ其方の歎きより。我が子と知りつゝ手にかける其時の心の内。コリヤどの様にあらうと思ふぞやい。アイヤなに六郎殿忠義といひ器量といひ。末頼もしき若武者を。やみくゝと先立てて。此兵庫は生存へるを卑怯とさみして。ッシ下さるな。詞ア、イヤ死ぬは一旦にして安し。跡に残つて若君を守立つる其方の大役。死するに増る千辛萬苦。其上一人の秘藏子を。イヤ三代相恩のお主の爲には。我が子を殺すもヲ、サ身を捨つるも塵埃と

も思はねども。君を守立て朝敵を亡して。天下の苦しみを安んぜんと思ひし事も皆むだ事。地時に逢はねば名將も仇に過行く光陰の。矢口の渡しでやみくゝと。詞愚人ばらがあざとき方便に討たれさせ給ひしは。お家の不運か南朝の衰ふべき時なるか。是非に及ばぬ兵庫殿。六郎殿。無念。地々々と手を取組み忠臣義士の溜め涙。天に通ぜば銀河堤もッシ切れて。流るらん。地御臺所はむせかへり。我が子を捨て命を捨つる。かゝる家來のありながら。御運拙き我が夫の。御身の上の悲しやと。過ぎし事までッシ思ひ出し悲嘆の。涙にくれ給ふ。地六郎は目を見開き。詞ア、後れたり狼狽へたり。死する所は違ふとも。我が一念は亡君の御跡慕ひ奉らん。さらば。地くゝと聲の下。吠の鎖をかき切つて。かつばと伏して、ッシ息絶えたり。地妻は泣くゝ我が子の死骸

ッシかき抱き。地稱ふる回向は弘誓の舟。生死の岸に煩惱の。流れを渡る。ッシ三つ瀬川。地々々かはいや先立つをさな子は。無常の風の櫻川。塵にまじはるコリ芥川。ッシかゝる浮世に隅田川。兵庫が心の荒川と見えしも智謀深川の。深き忠義のむねの中。みがき立てたる玉川や瀬は瀬となる飛鳥川。御臺所は若君に思ひも寄らず。藍染川。六郎が魂魄は。主君の跡を大井川。其源の濁りなき君に。仕ふる武士のやたけ。心ぞ頼もしき

第四 道行比翼の袖

歌 白玉か。何ぞと。人の問ひし時。露と答へん落人の。身に添ふものは。ナホスッシ影ばかり。それさへ月の入りぬれば。二人はもとの二人にてホッけふ立初めし旅衣。地きるに切られぬ縁の糸結ぶの。神の神かけて。二世も三世もまだ。先の世

も。かはらぬ中の。ッシ義岑は。地過ぎし八幡の難儀よりオクリしるべの。方にやうくと。其地豪諸共忍ぶ身の忍ぶとすれど忍ばれず。まだ夜をこめて鳥が鳴く東の方へとたどり行く。ッシオクリ心の内ぞ。たよりなき。二玉り其二人が中はつき出しの。其日に呼んで吳竹の。ふしぎな縁で。大津ぞと皆口の葉に諷はれて。カハッキ互に上る坂の下人目の關も龜山の性の悪いは男のならひ。見せかけばかり石薬師。女郎に苦は。ないものと。見やしやんしたは間違ひのかういふ事になるみ潟。おまへも。捨てて岡崎と。思へばわたしも藤川のもつれ合うたる胸の内。打明けていやあか坂のなんば源氏の大將でも御威勢に惚れや。せぬわいな。器重吉田の。二かはめ下さまの事しらすかのあらひ上げたる殿振りに。深うはまりし濱松の。素振りをナス見付けられまいと。

地誓紙を隠す袋井の契りを。江戸番兵二世と掛川や。金谷せぬとはいみ詞。ッシ言はぬ島田のオリ亂れ髪。ッシ人目に。心沖津川。地由井しよ正しき御身にて此有様は何事と。思ひ廻せば廻す程。腹の立つのは女の癖。顔つくくと三島より運ぶ箱根の山こえていつかは時に大磯とスエ打涙ぐむばかりなり。義岑公も諸共に。しをるゝ心取直し。詞大事をかへし我が身なれば。鎌倉へ忍び込み。再び御矢を取りかへすか。兄上の敵を討つか。二つに一つ何れにも。助かりがたき我が命。地そなたは都へ立歸り亡跡とうて。スエくれくと。跡は詞も涙なり。臺ははつとせき上げて。ナスソリヤ餘りちや。胴怒な。今更いふではなけれども。勤めの身にて勤めをば離れて逢ふは勤めせぬ人よりは。又。百そうばい。粹ほど結句。愚痴になり根のない事に腹も立ち。口舌い

うたりつめつたりあちら向いても張弱くついた拍子に下紐も。猶打解けてひつたりと。抱きしめたる睦言に。かはいくの明鳥。盡きぬ咄につく鐘の。サリならう事なら夜の明けぬ國に生れて。いつ迄も。抱かれてねやの際白く。置き別れても。移香の残る思ひの。十寸鏡。片時顔を合はさねば生きて居ぬ氣を知り乍ら。むごい心とばかりにて緋り付いては。ッシ中に。地シ離れ難なき花水の桶も。漸う打過ぎて。平にくと平塚や所縁求むる藤澤に。宿のおじやれが撃々に。三下り歌東男に都の。女郎。いきと情を一つに寄せて色で。丸めた戀の山。傍で見るとへにくらしい。そりや餘り。強過ぎる。武蔵野の月。吉野の櫻。景と風情を一つに寄せて雪で。丸めた富士の山。噂聞くさへ美し。そりや餘り。強過ぎる。ナスンシ諷ふ一ふし聞捨てて。いそげば道もと

つかはと故郷も近き程ヶ谷と オクリ思へば。いとど二つ文字牛の角文字。直ぐな文字。讀み盡くされぬ。かな川に漸うたどり 三葉(さん)着き給ふ。

歸妙頂禮地藏尊釋迦の附嘴を憶念し。悪趣に出現し給ひて衆生の苦患を導

けり。ナホスツン鉦鼓の聲も。幽かなる。

生麥村の離れ家に。住めば都と墨染に。

浮世を捨てし道心者。ホラシたそがれ前の

看經は。殊勝にも、ッレ又もの淋し。地大

海は塵を擧げず不淨にも。日は照る國の

公や。持餘したるあぶれ者。道具置ぶつた

くりの萬八がゆがみ捻れた繩のれん。頭

で明けてすつと道入り。コレ道念殿。

看經もモウよさつしやれと。地いへど應

も。一心不亂願以此功德平等施一切發善

提心住生安樂ちやんくくと、ッレカ、リ

鉦打納め燈明しめし。同ホ、萬八様お出

でなされませ。イヤ坊様精が出るよ。し

たが先の知れぬ後生願ふより施餓鬼かおんぞうでもちろかい。ハイ其おんぞうとやらせがきとやらをもぢるとは何の事でござりますぞ。イヤコレとぼけた顔せず

とおらは大乘打明けて仕舞はしやれ。デモ一向に存じませぬ。ハテやばなわるち

やの。おらは圓者の相談に寺方へ出入る

故よう覚えて居ります。おんぞうとは

鯛の事だが。宗旨によつてしゆきんとも

又鉢巻ともいふげな。せがきとは鱈の事。

又鯖を普賢といふ事は法華經とやら二十

八とやら片假名とやらへちまとやらで。

八宗を兼學せにや一々は知られぬことだ

と。檀那寺の和尚様がお花の席で話され

た。今時の出家がこんな事知らないでよ

い寺は取れぬぞや。次手に覚えて置かつ

しやれ。コレ人足とは石持の事。百姓と

は田作りの事。こい等はすんど覚え易い。

鮎を天蓋というては凡夫めらが悟る故

に。今では袋足袋とやらかすだ。地國姓爺とは蛤淨國とは鮑の事。よう稽古し置かしやれと。地いへど相手になら柴折りくべ、ッレ火を吹付けて。同イヤく

かう頭を丸めては脊が喰ひたいとも思はねば。聞いて置く氣もござりませぬ。

イヤくそれは悪い料簡。世帯佛法腹念

佛。コレ坊様。そんな片意地言はずとも。

此方に少し頼む事がある。何と聞いて下

さるべいか。ハアテ頭を丸めた役なれば。

お前のお爲になる事ならとは忝い。別の

事でもないがコレ。高がかりだわ。貴様

を歷々の和尚に仕立て外に釣出す仕事

がある。どうぞ頼まれて下され。ア、イヤ

イヤくそんなおつかない事は赦して下

され。ヤレくこはヤ恐しやと。地取つ

ても付かぬ杵で鼻。嘴付く様に萬八が。

同イヤコレ御坊。餘り潔白にやらかして

も己ががんばつて置いためんかのまぶい

術妻の事さ。ハイ。いやさ昨日の暮れ過ぎ
器量のよい女と若い男が。爰の内へ入つ
たをとりと見て置いた。あれは儘に
墮落者おちおちなた一人の仕事にや行くまい。
おれと相談する氣なら男めをまいて仕舞
ひ。玉を此方こちへ引つたり。品川へ賣つ
てやれば十兩詰から上の代物。したがコ
レ。弓筋ゆづり筋なら金にやならぬ。又親指に
肉がなけりやこれも商賣屋で嫌ふ事。氣
を付けて置かつしやれ。癩痢らいりを試すには
なた豆喰はしやつい知れる。身の代はこ
なたと山割り。なんと甘いか。甘いか。
地ちと己おのれ一人が吞込んで濡手で粟のぶつた
くり。世に萬八といふ事は。此男。フシ
より始まりける。地ち道念は無氣むきまじめ。
詞ハテさて御前とはんだ事。明るけりや
月夜だと思つて。起きてゐながら寝言い
はしやる。一人住みの此庵室あなむち。墮落者おちおちと
やら女子おんなとやら其様事は存じませぬ。そ

んならこなたは知らないか。知らなけり
や是非がない。必ず後悔さつしやるなど。
地ち苦くるを放してじろくそそら傍あたを見廻
しオッペ見廻し立歸る。詞ヤレくくと
んだ男がある物だと地ち言ひつゝ立つて。
詞ホ、冬の日はさて短い。話する間にも
う暮れたと。地ち表を遙に眺め遣り。内へ
這入つてあたふたと門の戸しめてフシせ
ど口の。地ち稻荷いなほの社の扉を開けば。内よ
り出づる義岑公臺ぎさんこうだいも共にフシ情なさけれ顔。詞
マアくこちへと。地ち内へ伴ひたつた一
枚嗜みの掛川莞筵かがわかんぜんをさらりと敷き遙下とほづ
てフシ手をつかへ。詞思へば盡きぬ御縁
とて。昨日不思議に御目に懸り。御供申
しは申しながら世を忍ぶ御身なれば。人
の見る目を憚れども。地ち見る影もなき此
庵室。忍ばせ申す所もなく。詞幸ひとア
ノ稻荷様は。此村の鎮守ちんしゆにて。預りの此
道念外みちねがへから觸ふひ入てもござりませぬば。

神は見通し稻荷様へ。御詫申して暫しの
隠家かくれが。地ちさぞ御氣詣り御究屈ごきよま。いかに世
の末なればとて。義貞様の御公達ごこうだち。義岑様
ともあらう御身がこの有様は何事ぞと。
こぼす涙に義岑公。詞思ひがけなきそな
たの世話。何角に付けて心遣ひ過分くわぶん至極
と宜へば。地ちほんに不思議の御縁にて見
ずしらすの私まで。いかにお世話とはか
りにてしをるゝ姿。海棠たいようの雨を帯びたる
フシ風情ふうじやうなり。詞アイヤく其お禮には
及びませぬ。私はお前様をよく存じて居
ますれど。末々の者なれば御見知りも遊
ばしますまい。兄御様に附添うて武蔵野
の御合戦。矢口の渡の御最期迄始終御供
に参りし者。其證據御目にかげんと。地
佛壇の下戸棚ぶつだんのしたのひだり。フシ明けて取出す一包み。
コハッ内に何かは白木の箱はこ。蓋ふたを開いて有
合はす。物干竿ものほしを手ばしかくきりくし
やんと押立つれば。外に類ひの中黒なかつくろは。紛

ふ方なきお家の白旗。壁に立掛け飛び退り。ノリ御旗を所持する此坊主は。元來お家の御旗持ち。久助と申す者にて身は輕けれど禮儀の御家來。地矢口でお果てなされた時の其無念さ口惜しさ。詞冥途のお供と川端へ幾度か立寄つたれど。

御先祖より傳はりし大切の此御旗。敵の手へは渡すまじ。一先づ故郷へ持歸り若君様へ差上げて。其後は死んでくれうと殿様の御最期を地見捨ててすこゝ歸りましたりや。詞情なやお家は亡び城は敵に乗取られしと。聞いた時の本意なさ悔しさ。おのれやれ敵の中へ踏込んで一人なりとも切殺し。死んでしまをと思ひしがイヤイヤ弟御のお前様のお行方を尋ね出し。御旗をお渡し申さんと。此通り姿をかへ上方へと思うても。差當つて路金はなし。行方知れぬと聞くからは世間も少と鎮まつたら。故郷の方へ御出で

あらんと。此所に住居して托鉢するも海道筋。待ちに待つた甲斐あつて。昨日不思議にお目にかかりましたは。私が存念が届いたか。有難やと思へば思へば嬉しくて。昨夜もろくく夜も寝られず。嬉し涙で此正月。名主殿からしてくれた。布子を涙で絞りましたと地吸り上げたる泣聲は。奇特にもッシ又。哀れなり。地義岑公はから手水。御旗を取つて。押戴き。此旗を見るに付け。討死なされし兄上の最期の御無念思ひやる。地思へば八幡にて。我を殘させ給ひしも。生存へて家を繼げと言はぬばかりの御情。それに引きかへ義岑は。若氣の至りの不行跡。遊所より付込みし竹澤が計略の。元を探せば皆我故。手こそおろさぬ兄上を殺せしも同じ事。其天罰にて此艱難。御赦されてスエ下さりませと歎けば臺は臆上げ。敵の方便にたられされて。とや

かう言うたが種となり。兄御様の御最期の悪人を引入れし科人は此臺。御旗の手前も恥かしい。罰當りの我身をば殺し給へと地打伏して又さめ。くんと泣き居たる。道念は目をすり赤め。詞言うても泣いても返らぬ事。此上にもお前様はお家を興すが御孝行。私はいふ身の上。これより諸方を修行して。他力を借りて我が君を一社の神に祝はんと。地思立つたる道念が志願は今に傳はりて新田の社建立と。たえせぬッシ修行ぞ頼もしき。かゝる折しも。地萬八が勧めにて一度に寄り来る百姓ども。内にはハット驚く道念。義岑公は手ばしかく御旗を取つて懐中し又も隠る。ッシ稻荷の社。地表の方には無二無三戸を蹴破つて一時にどつと遣入れば。イヤア何奴なれば狼藉と言はせも果てすコレお坊。此萬八が相談に乗らぬからはお觸のあつた駆落者引縛つて

連れて行く。玉は何處へこかしをつた吐せ〜と搦付くさうはさせぬと道念が。

地有合ふ鬻刀を追取つて切つてかゝれば百姓ども御免々々と逃行くを跡を慕うてフシ追うて行く。地萬八は小戻りし社を目懸け立寄つて。扉を明けんとする所へ取つて返す道念が。鬻刀振上げし勢にコリヤ敵はぬと萬八が一散に、フシ逃げて行く地猶もやらじと追つかけしが半途より立歸り。扉を開き二人を呼出し。爾今の奴等が歸らぬ内。此道より落ち給へと。勤めには非なく義孝公。臺も用意をこ〜に。あてどもフシなしに落ちて行く。地道念跡を見送りて社の内へそつと這入り。扉を立てる。フシ間もなく。地追々歸る百姓ども萬八も一度に落ち合ひ。爾コレ〜皆の衆玉の在所は見て置いた。さつきにもいふ通りなんでもかでも二つに割り。半分は俺がしてやる。半分を惣割だぞ。

地皆こい〜と立ち掛り扉開いて引出せば。思ひがけなく道念が。狐の面を引被りすつくと。立つたる有様に地ワイと驚く百姓ども。萬八も惻り、フシ敗亡。道念は作り聲。爾うぬらが根性ため直せと稻荷大明神の御神託。謹んで地承れと横飛こん〜狐の身ぶり百姓共は身の毛立ち只ハア〜とばかりにて一度に頭を地にすり付け尻もつ立つてフシひれ伏せば。地仕済したりと圖に乗る道念。爾汝等が心を試さんと。假に女の姿と化し此所へ來りしに。強慾無慚の百姓めら。文彌地稻荷の神の御前にて田畑残らず踏みあらし。思ひ知らさん思ひ知れとはつたと。睨む目も口も面で。地隔てて見えねどもふんぢがつたる勢ひに。恐れ慄く百姓共。爾リア、申し〜それは餘りお胴慾様。私等は露塵程も曲つた心はござりませぬど。此萬八が頼む故雇はれて參つたばか

り。御免なされて地下ざりませと、フシ口詫げれば。爾ム、そんならこの以後落人など搦め捕るとは言はぬか。何がさて〜。それなれば赦して取らす。ハア有難うござります此お禮には小豆飯。イヤまだある〜此庵の道念が托鉢に出た時。通れと言はずにたんと入れるか。何がさて〜。大抓みに入ませう。それなれば赦して取らす。此萬八めは大悪人。井浦汝常陸の抜參りの。小娘を勾引し神奈川へ飯盛に賣つた事地覺えてゐるか。爾南無三寶是は委しよう御存じ。其時は博突に負けしやう事なしの出來心。微塵も慾では致しませぬ。お赦しなされて下さりませ。イヤまだある〜。イセオンド伊勢原の百姓が。御年貢納めに出る所をおこはにかけて船へ乗せ。五十三兩負けさせた其言譯はちつともあるまい。爾ア、悲しやそれ迄を御存じか。さう知られては

お堪りやない。まだある〜。隣の權助が房州へ歸郷にいた留守で。かゝアを汝がちよろまかし孕せた迄知つてゐる。コレハさてきつい見通し。イヤモ一言もござりませぬ。ヤイ〜百姓共ハハイ聞く通り大悪人。萬八めが村に居る故。そこで此村が禁昌せぬ。村境から追放する俺に付いて引つ立て來れ。ハア畏つたと百姓共。萬八を壓狀すくめ。道念は神前の幣帛取つて先に立ち。張る打奪りの萬八はヨイ〜。怒の深い事は廻町の井戸よヨウイ〜ヨイ〜ヨイアリヤリヤコリヤリヤ。二上キヤリ練馬大根で太いの根と來た。爪の長さが三十三間三尺三寸三分三厘三毛三拂。そこで稻荷様の腹を立て。ヨイヤサ王子の親玉眞先がけ三圍笠森鳥森。杉の森から三崎熊谷齋麥切九郎助福徳愛敬稻荷に西の宮。此神々の御前にて。そこらは若衆頼

みます。此萬八めを締ろやいヨイサ〜ヨイコレハノサヨイヤナア引立ててこそ三圍行末の。六郷は近き世よりの渡しにて。フシ其古は。都より。東へ通ふ旅人の廻るもオトリはるか弓と弦。矢口の渡と聞えたる。ホフシ其の水上是は調布や。さらす垣根の朝露を。貫ぬき留めぬ玉川の舟を浮べる流れより。フシ知れぬ心の底深き。地渡守の頓兵衛が内とは思ひ棧作。物好きしたる亭座敷渡世には似ぬ家作は。瑠璃の階瑠璃の門扉龍宮城の乙姫かそれかあらぬか娘のお舟。鶯が孔雀のぼつとり者。田舎に惜しきフシ姿なり。地壇桶に水を打擔け立歸る下人の六藏申しお舟様。同モウ料理は出來ましたか。旦那殿はまだ晝寝。ほんにマアあらう事か。今渡守の頓兵衛というては。おそらく日本國中に續く者なき大長者。なれども餘り人使ひがひどいから。幾度置いても奉

公人が。三日とは居たくまらぬ故。お娘御のお前が。龜元の世話なさるで。可愛いらしい其お手が荒うかと思へば悲しうて〜。酸漿程な血の涙。御家老か番頭かと敬はれる此六藏。渡舟を漕ぐ隙々に。薪を割つたり水汲んだり。いまいましい事ではある。こゝな内でも旦那殿と渡舟がなけりや樂ぢやと。地小言にお舟は氣の毒顔。同コレ六藏人聞きが悪いと〜様の噂。地よしてたもれと制する折からどや〜と。しつかり候兵衛三上十次。からのびん助三人連れ。親分は内にかと揚り口からフシ大あぐら。地皆様ようお出でなさんしたと。お舟があいその真盆。同と〜様はまだ晝寝。御用があるなら起しませう。地といふ聲聞いて一間より欠伸まじくら。同ム、今そこへ行つて逢ふべいと。地ゆるぎ出でたる主の頓兵衛。雪を敷く白髪に朱を濃いだるしか

み面。強欲無道の、ッシ眼ざし。地八反掛の大廣袖紙子仕立の伊達羽織。どつかと坐して。阿ヲ、皆揃つてよう来た。して仕合せはどうだぞやい。どうかう所ぢやごんせぬ。持つて立つた大失敗。三人乍ら此中の元手。すつぱり負けて仕舞ひました。地面目もなき仕合せと。ッシもぢかはすれば。阿ム、ソリヤさんくな目に合うた。えいわ。負ける時がなけりや勝つ事もない道理。ちとはかり負けたとて。補鍋匠が華鯨を請合うた様に。騒ぐ事たないわい。今一勝負やつて見ろ。コリヤ娘よ。ソレ板厨の金を出してやれ。アイ板厨を明けるにも及びませぬ。さつきに品川の兵五郎様と青山の萬九郎様が見えて。日外借りた金ぢやとて。持つて来てでござんす故。つい掛覗の引出へム、そんなら出してやるべいと。地引出明けて。

阿ヲ、幸ひ爰に六包有る。一人前二百兩

で足りずばもちつと借さうかといふに。地三人肝を潰し。阿ナント聞いたか。ヲイヤイ。凡そ金持も多けれど。つがもないはした錢か何ぞの様に。掛覗にも六百兩。目出度いといふも程がある。サレバサ。昔からない物は金と化物といへ共。化物はまだも出ようが。今時ない物は錢金。折々氣ばらしに芝居を見ても近年は淨瑠璃でさへ。何ぞといや金のない事。餘りけちな此時節。有る所にはかう澤山。マアどうすれば此様にめつたに金が出るまするぞ。話して聞かして下されと。地

いへば頓兵衛烟管こちく。阿イヤサ皆が料簡が悪いから。出来る金も出来ないわい。塵が積つて。地山といへど積る内には又吹散る。阿二文四文ぢや阿埒や明かない。出世しようなら相場か金山博奕は勿論。地是も近年はこすいかうで能い鴨もッシかゝらぬ故。阿此頓兵衛が思付き。か

の鎌倉で貸元の大將。地足利尊氏様と謀反勝負の義興殿が。やみ雲の高つぱり。阿武藏野の窩賭で大勝負。元手の強い尊氏様も根こんざいぶち負けて。コリヤ一番切替うと鎌倉へ。地コリヤ益がへ。何か破れかおれの義興。うぬが命を投げ長牛。鎌倉へ仕掛けの博奕。阿手におへない首尾に成つたを。地鼻つぱりの竹澤監物殿。かすり取りの江田判官殿から。阿此親父へ人をよこして。てらをしてくれると思つて。どうぞ魂膽してくれろと。モ色々とお頼み。地ハテ後生こそ願ふまいけれ。阿人の爲になる事だ。ぢやが。甘口ではいけまいと。水銀奴からの思ひ付きで船の底を割抜いて。六藏めにさるを引かせ。一番ごつきりて義興めを。地

川中でぐはんと言はせた。ッシ其御褒美に此頓兵衛。阿尊氏様の尻持ちで。大名になる筈なれど。それでは結局氣が詰り。

好きの博奕が打たれませぬ。大名けんどんよしにして。矢張りたべ付けたぶつかけの渡守がよござりますると申上げたりや。そんなら何なと望めとある。そこでお金をしたゝか請けて。地せいつを元手に大勝負。勝つ程にける程に。持丸長者とは。フシおれがこと。阿かう普請をやらかしても。昔を忘れない様にと。アレアノ通り床の間に櫛や簀を飾り物。地出生の因縁かくの通りと。フシ語るにぞ。地三人は不審晴れ。阿それで聞えた。そんならおいらも一思案。何ぞあてすつばうにやつて見よかい。チャガくり抜かうにも船はなし。是から坪皿をくり抜いて硝子入れてやらかさうナウ候兵衛。イヤイヤそれよりもおらが望みは。爰なお娘の舟底が剥抜いて進ぜたい。地サア〜お暇其内と。フシ皆々打連れ立歸る。地道引違へて走り來る村のあるきがすつと這入り

阿申し頓兵衛様。お尋ね者の事に就いて。竹澤様から御用がある。庄屋殿迄只今一寸。ム、お尋ね者とは知れた事。新田方の落人の。御詮議であんべい。それなら行くにや及ばない。どちらから來ても此渡しを渡らにやならぬ一筋道。兼ねて竹澤様と謀合せ。新田方の落人が。若し此所へ來るが最期。相圖の烽火を上げると村々で法螺を吹けば。竹澤様から捕手が出る。若しも俺が方で搦取るか討取るか。加勢に及ばぬといふ知らせには。アノ亭座敷の上に釣した太鼓を打てば。村で取圍んだが皆ちる約束。庄屋どのが大きき面で。どう參つたかう參つたと隣の婆様茶を參つたとむだばかりいうであら。何か様子は知りませぬが。呼んでこいとこの言付け。そんなら一寸行てやらう。ヤイ六藏。若しも落人臭いやつが見えたら。烽火と太鼓の手都合を忘れるな

と。地腰に大だらぼつ込んで。フシ小底を連れて出でて行く。地跡に六藏小聲になり申し〜お舟様。阿エ、お前はむいとすり寄れば。阿と〜様の留守になる。又ちやら〜とてんがうばかり。アイヤてんがうぢやござりませぬよ。とうからお前に惚れて居て。何ぼ口説いても戸板にごろ付豆よ。其豆故に身をつくし。根津音羽はいふに及ばず。氷川から補綴樓。朝鮮長屋鮫が橋。蘿蔔園迄ほつたれど。笠森のおせんと。お前程なほどつこにもござりませぬわい。コレ申しどうぞ叶へて下さりませ。アレ〜。テモ耳の早い奴ではある。コリヤたまらぬと抱付く。地放せ〜と。フシり合ふ所へ。地表口から日傭の八助コレ六藏殿。阿ちつとの内用がある。代りに渡場頼むというて。俺に任せて貴様はコリヤしなしやなく。親玉へ知れると毛氈をかぶ

る出入りだ。地サア／＼ござれと引立つれば阿イヤ少仕かけた用がある。もちつと待つて下され。イヤ／＼待つ事はごんせぬ。貴様の顔で色事とは唐茄子もモウ古い。飛んだ茶銃が西瓜と化けたとッッ打連れ舟場へ急ぎ行く。地娘は跡に獨言。阿けふの髪は上村のおみよ様が。筋立ててくれなかつた大事の髻を損うて。此并の吹廻しの。地紋迄なくして仕舞うたと。ッつぶやき／＼入りにける。驚森の番離れぬ。ッ二人連。地義岑公は漸うと道念が忠義故。生麥村を落ちのびて。新田の方へと志し矢口の。ッ渡しに差しかり。阿ナウ豪叟が兄義興殿の御最期ありし矢口の渡し。此水底の怨しやと。地川に向ひて合掌し。南無尊靈出離生死願生菩提と。地阿向の聲と諸共に。暫し涙にくれ給ふ。ッ臺も。俱に涙聲。阿ヲお歎きは御尤も。早う新田へお歸りあ

り。御一門をかたらひて。御矢の詮證見御様の敵をお討ち遊ばせと。地諫むる詞に義岑公。阿見れば渡しに人もなし。道にて聞けば此家が。渡守の内とかや。地頼んで見んと門口に歩み寄り。阿頼みませう／＼と宣へば。奥より走つて娘のお舟ッ何の御用と立出づれば。地義岑公しとやかに。阿川の向ふへ參る者。舟の無心との給へば。地顔つく／＼と打守り。阿イエ／＼舟はいくらもあるけれど。落人の詮證で日暮れては出させぬ。その上にお前の様な美しい殿御には。貸す事は猶なませぬと。地顔に見とれてうつとりと心の内は焼がらの。胸をこがせる薄烟。いとしと思ひ懸香のどうぞ留めたきッ下心。地義岑公は氣のどく顔。阿我々は急ぎの道。暮に及んで宿屋はなし差當つて難儀なれば。何とぞ渡しして下させ。イエ／＼どうあつてもなませ

ぬ。宿屋がなくば私の内に。泊りなさせたがよいわいな。ソリヤとめて下されうか。留めいで何といたしませう。地それは近頃忝い連の女が持病の病へ。幸ひのよい足やすめ。ッ臺こつちへと呼入れば。阿ム、スリヤあなたはおつれ様かえ。エ、にくらしいと地びんとする臺は會釋し旅づかれの私ら。お留めなまつて下さるとは忝うござんする。アイお前もお連れなら。おとまりなさんせ。サア申し。見ぐるしけれどアノ奥の亭座敷がよい見はらし。地あれでゆるりとお足休め。しからば左様と義岑公。臺諸共打連れてオッ奥のへ一間に入り給ふ。地ッ跡打ちながめ娘のお舟。阿ぼんに美しいといはうか。可愛らしいといはうか。とても女に生るゝなら。あんな殿御と添うて見たい。それはさうとあの女中。兄弟なりやよいが。もし夫婦なら。わしや何とせう

と。地おぼこ娘の一筋に思ひみだるゝ糸芒。穂にッあらはれて見えにける。地義岑公は一間を立出で。阿申し〜お女中。つれの女が薬たべる。お湯の無心と地宣へば。娘はハツト手もち〜。阿申し旅のおかた様え。お前にちつと御無心がござんする。コレハしたりかうお世話になるからは。何なりとも御遠慮なう。アイアノ。連の女申様は。妹御でござんすか。お内儀様でござんすかえ。これはさてかはつた事に御念が入る。アイお妹御ならようござんすが。若し御夫婦ならこつちにもつと濟まぬわけがござんする。アイ成程。あの女は私の妹。久々の病氣ゆゑ。保養がてら浅草の観音様へ。連れて參詣致します。ア、嬉しや〜。それ聞いたらもう何もかも入りませぬ。お前どうぞ私が内に。十日も二十日も。十年も。百年も。逗留なされて下さりませ。

せ。したが私らが様な田舎者は。相手になるもおいやであらうけれど。エ、もうつんと。わしにばかり物言はせ。コレイナ〜。こちら向いて下さんせと。地右よ左と付け廻す。琥珀の塵や磁石の針。粹も不粹も一樣に迷ふが上の。ッ迷ひなり。地義岑公は氣のどくさ。阿思ひがけなきお宿の無心。いかいお世話になりますると。地入らんとし給ふ杖をひかへ。阿ソリヤ餘りでござんする。是程思ひ詰めたものを。返事のないはお胸懲。地なんぼ田舎生れでも惚れたが因果惚れられたが。不祥と思うて下さんせ。サ、日かげの木々も花さけば岩のはさまの溜り水。すめばすむ世の思ひ出に。叶へてやらうとつい一口。阿いうてくれたが。よいわいなと地すがり付いたる袖袂。さほらで落つる玉笹のッあられもないが戀路なり。地義岑公も稻舟のいなにもあらず。阿ム、それ程迄に思うて下さるお志。さら〜仇には。思ひませぬと地じつとしめたる手の内は。戀の錠前情の要。互に抱きつき草の。うつろひやすき色糸のぬれの糸口。口。すひ付き引付きしめ付けてッ離れがたなき風情なり。地時にふしぎや義岑公。娘も共に色かはり。ハツト身震ひ忽ちに。ッどつかと倒れ息絶えたり。地昔に驚きかけ出る臺。コリヤ何事と狼狽へながら。柄杓の水を口うつし。介抱しても呼びいけても。其甲斐さらになんかたも。思ひ付いたる氣てんの臺。扱は娘の色香に迷ひ。心の穢れ御旗の咎めなるかと手を清め。義岑公の懐へ手をさし入れて件の御旗。さつと開けば忽ちに二人は夢の。ッ覺めたる心地。地表の方には六蔵が戻りかゝつて。親ひ足。義岑公あたりを見廻し。阿此家に泊りて親ひ見れば。家業に似ざる普請の

結構。様子といひ場所といひ。かた／＼もつて心得ずと。娘が戀慕を幸ひに問ひ落さんと思ひしゆえ。近寄れば今のしだら。仔細ぞあらん此家の内と。地御旗を取つて巻納め。豪來れと引きつれて、奥の一間に入り給ふ。地跡にしよんぼり本意なげに何と詞もなげ首し。長槍たづきも知らぬ海中に拵なきお舟が物思ひ。打ちしをれてぞ、居たりける。地表に控へし六藏は。木部屋に隠せし一腰ぼつ込み。詞アノ旗を持つからは。粉ひなき新田の落人。相圖の狼煙を上げうか。イヤ／＼討手を引きうけ討たせては手柄にならず。拔懸けし搦め取つて褒美の金。おれ一人でせしめてくれん。うまい／＼と地うなづき／＼奥を目がけてかけ入るを。立ち垂がつて娘のお舟。詞コレ六藏。そなたは奥の旅人を。何とせうと思やるぞ。ヤア何ととは知れた事。さつきにと

くと見て置いた。中黒の旗持つからは新田の落人。義岑に違ひはない。去年親方と相談して。舟底をくりぬいて。義興を殺す時は。命がけのこと手傳はせ。御褒美をもらふ時は親方一人であたゝまり。此六藏はおちやつびい。出物になつて今に此さま。其弟の義岑。此度はおれが生捕つて。御褒美丸であたゝまり。おれも出世をせにやならぬ。邪魔なさるりやお主とて容赦はないと。地とめても留らぬその勢ひ。一間に立聞く義岑公。娘は一途に戀の邪魔。拂はん物と、思案を定め。詞ア、無理にそなたをとどめはせぬが。何ほ言つても相手は武士。若し仕損じまい物でもない。僅かの褒美に目がくれ。わしが言ふ事聞かぬからは。是迄何のかのといやつたは。皆うそかやと地いはれて悔り。詞ソリやお前ほんの事か。イヤ／＼。アノ奥の男めに氣がある

故おれを留めうといふ謀。さううまくは參るまい。イヤナウ。そなたの心を見た上と思つてゐた故。是迄は返事もせんのだが。それとも疑やるなら。そなたの勝手にしたがつよいと。地びんとすねられ六藏は。惡寒發熱あたまに湯氣。詞コイツハエイワイ／＼。それならおまへは。此六藏が性根を見た其上では。きまつてくれるといふ腹か。サイノ。そなたがおれと夫婦になりや。と、様爲に子ぢやないか。親子の間に抜けがけして。一人の手柄にするにや及ばぬ。と、様は庄屋殿へ行つてなれば。とくと相談した上で。どうともしたがよからうと。地口へ出まかせ間に合せを言つて水槌や詞の拵。わたり舟と六藏は乗せかけられてふはと乗り。詞コリヤ近年にないよい目が出たわい。そんならわしは庄屋へいて。親方を連れて來う。奥の奴等を逃がさぬ様。氣

を付け給へ女房共と地延びた鼻毛のともめんぼう。フシ振廻してぞ出でて行く。地しすましたりと門の戸の懸金かけてとつかはとフシ一間の内へ入りにける。地フシかくて時刻も久方の。空さえ渡る冬の夜の。ホフシ二十日ぬなかの月出でて。遠寺の鐘のかうくと。帯に流るゝ川水も。フシいともすこき門口の。地一群茂る藪の中。ぬつと出でたる主の頓兵衛。時分はよしと呼子の笛。扉の陰より下人の六藏。頓兵衛小聲に。ワッコーヤ〜六藏。娘めが目を覺し邪魔ひろげば川水面倒。物音のせぬ様におれ一人忍び入らん。手前は表に氣を付けて。もし逃出さば討取れよ。ワット合點と地うなづき囁き六藏は元の小陰にフシ身を忍ぶ。地頓兵衛は門の戸を引けど。しやくれど明かされば。大だら引抜き壁切りあけ。はいれば吹込む川風に燈火消えて眞の闇。勝手

覺えし我が内も慾に心のくらまぎれ。忍べばいと身も重く。床はぎち〜足音の耳へはいれば立留り。一息ほつと次の間へ又も踏出す。足の下びつしやり碎ける煙草盆。エ、どんくさいと心では怒りながらもそつと投げ。襖にばつたりあいたしこオケリなんなく。忍ぶ亭座敷。梯子の上へ二足三足。阿イヤ〜〜きやつも名に負ふ義興が一族なればこは者と。地心でうなづきそつとおり。下屋へ廻つて探りより。闇にも光る段平を抜いて突込む二階の板。上にはワット玉ぎる聲。してやつたりと刃物引抜き血おし拭ひ。二階のフシ梯子かけ上り。地障子蹴放し月影に夜着引きまくりて見て悔り。阿ヤア〜わりや娘か。お舟かと地フシ驚きながら。阿義岑と女めはいづくへやつた。有りやうにぬかせ。地有りやうにぬかせと目むき出し怒りの大聲。フシ娘は顔を

つれ〜と。恨めしさうに打ち眺め。阿申しと〜様。浮世に生れた人ごとに。慾を知らぬはなけれども。お前のやうにこり固まり。佛とも法ともわきまへず。人は死なうが倒れうが。我さへよければかまはぬと。身勝手ばかりの強慾非道。あらう事か源氏の大將。義興様をたばかつて。むざ〜と殺したる。其天罰が我が子に報い。宵に泊りし旅のお方。義岑様とは露しらす。地可愛らしい殿ぶりに恥かしながら心の迷ひ。お側へ寄れば恐ろしや御旗の咎め。阿義興様の御怒りにて悶絶せしも。さうとは知らぬ懸路の闇。さいぜん六藏を追出し。一間へ忍び様々と歎きしに。義岑様のおつしやるには。兄を殺せし頓兵衛が娘ゆゑ。此世で添ふ事ならねども。親と一所でないといふ。一つの功を立てるなら。未來で添はうとおつしやつた。其一言がわしや嬉しい。此

内にお出であつては。お身の上も心許なく。委細のわけを打明けて。月の出ぬ間を幸ひに。船にて落し参らせしと。地聞くより頓兵衛ぢんだふみ。娘が髻引つつかみ。阿エ、おのれはくく大膽千萬な。見ず知らぬ男めに惚れくさつて。親の大事を他人に打明け。手に入つた代物を。ようもく落しをつた。道しらす。罰あたり。地情つくいやつと拳振上げ丁々。手負ひの上の打擲に。娘は息もたえなくに。阿エ、罰あたり道しらすといふこと。お前も見事御存じか。つねく不埒な勝負すき。あまつさへ恐しいわらだくみが仕たらいで。たつた一人の娘の戀人。殺さうといふ悪心から。現在我が子を手にかける。あんまり非道ぢやどうよくぢや。地死ぬる我が身はいとはねども。あとに残つたお前の身の上。案じ過しがせらるゝと恨み敷けば。阿エ、役に

も立たぬ世迷言。落人を取りにがして此親が立つものかと。地突退けはね廻け行かんとす。娘は袖にしがみ付き。阿意見うても軟いても。聞き入れ給はぬ無得心。かゝ様がござるなら。仕様模様もあらうもの。地何をいうても身一つに思ひつめたる義母様。此世で添はれぬ悪縁と。聞けば聞くほど猶戀しく。お手にかゝつて死んだなら親と一つでないといふ。言譯立たば未來にて。いとし殿御にあはれうかとそれを頼み二つには。一人の娘が先立てば一念發起もし給ひて。お心も直らうかとはかない事を頼みにて。覺悟きはめて死にます。娘かはいと思すならお心を騙へし。義母様を助けてたべ。頼みまするとどき立てワツトばかりに伏沈み。血汐に争ふ血の涙ふびんと。いふも愚かなり。頓兵衛はせうら笑ひ。阿此年迄仕こんだ根性。釋迦如来が元服して。

誤り證文書かうというても。いつかないつかぬ騙へさぬ。相圖を定めた義母めを取りにがしては。竹澤様へ約束の顔が立たぬと。地娘を取つて突きとばし。二階をかけおり川端に仕懸けし烽火に火うち早業。天を焦せる炎の光。かねて相圖の村々より。人を集むる法螺吹き立て。フンさも物すごき其有様。地娘は苦しき身をあせり。阿村々より大勢にて取巻かれ給ひなば。何とてお命あるべきと。地天にあこがれ地にひれ伏し。ヌエ正體。涙のひまよりも。思ひ付いたる一思案。上なる太鼓にきつと目を付け。阿此太鼓を打つ時は。生捕りしと心得て。村々の圍みを解くと最前聞いたが天の與へ。地爰ぞ殿御へ心中の。女の操と一筋に思ひ付いたる心の誠。よろめく足を踏みしめく。やうく鏡を振り上げて。打たんとしても手は屈かず。のび上りてはよろくよ

ろ。又起直つて飛び上り。どんと一聲かつぱと伏す。音に驚きかけ来る六蔵。それ打たせてよいものかと。抱きとどむるを突退けはねのけ等ふ内身輕に出立つ頓兵衛が。繋ぎし舟に飛びのつて。フシ櫓を押立てて漕出す。船上には娘が身をあせり。コレナウ〜と聲かぎり呼べど。

叫べど叶はねば。又もや撥をふり上ぐるおつとまかせと後より。ばち引つたくる六蔵が脇指引きぬき切り付けられ。欄干より眞逆様。フシ川へさんぶり水煙。

船上には娘がせんかたも。落ちたる鞘を振上げてめつたむしやうに打つ太鼓。響きに争ふ頓兵衛は櫓を押立ててえいさつさ手疵に癢まぬ六蔵が。日頃に馴れし水練に早瀬の浪を事ともせず扱手を切つてコハリ立ち泳ぎ。娘は死出の斷末魔。夫をしたふ執着心。蛇とも成るべき日高の川。領布庵山の悲しみも是には。いかで

増るべき。跡は間違になる太鼓遙に隔たる三度川向ふ。頓兵衛は腕限りなんなく舟を乗着けて。陸へ飛びおりフシかけ出す。堤の陰より高聲に。同ヤア〜新田小太郎義峯これにあり。匹夫め待てと呼びかけられ。頓兵衛は立留れば。すつくと立つて義峯公。同現在の兄の敵見通すべき奴ならねど。どうで助けぬおのれが命。娘が切なる志にめで。暫時の命助けしに。追つかける不敵者。モウ赦されずとフシ抜きはなせば。同ヤア飛んで

火に入る夏の虫。名乗つて出たは百年めけん頓兵衛が。つまづく所を義峯公。付入つて取つて組みふせ首をかゝんとする所へ。臺を提げ六蔵が。同サア義峯。親方殺さば此女たゞ一思ひとしめ付ける。地ハツト驚きたるみを見。持返して頓兵衛が。踏むやら蹴るやら叩くやら。同

リヤ六蔵娘が敵の二人の奴原。なぶり殺しにしてくれんと。地櫃と水楯のからざを打ち。無念々々と義峯公。臺は苦しき聲限り。力一ばい牛頭馬頭が。いつそとどめの一思ひ。今が最期觀念とふり上ぐる間もあら不思議や。いづくよりも白羽の矢二人がどぶえ射ぬかれて。フシ

其儘息は絶えはてたり。同お前にお怪我はなかつたか。そなたは無事かな。さるにても何者のわざなるぞと地引抜き〜。同ヤアこそは家の重寶。水破兵破の二つの御矢と。地驚き給へば臺は目早く。同其矢に何か短冊が。ム、げにもと月あかり。何々二つの矢を奪はれては。新田の家名の衰へんことを憂へ。我が一念の通力にて敵の手より奪ひ返し。其方へ與ふるものなり。新田小太郎殿義興と。地讀みもをばらす義峯公。ハ、ハ、ハ、扱は兄上義興公。お命亡び

給ひても魂たま魄たまはれい／＼と。家を思ひ。弟を憐み給ふ大恩。何を以てか報すべき。再また御矢手に入るからは。官軍をかり集め。朝敵を滅くだして兄上の恨みを散ぜん代々傳はる此御矢。家の重寶。武運の守り。地ハ、有難し忝しと躍り上つて悦び給ふ。末世の今に至るまで新田の社へ參詣し。守りの御矢頂戴の。フシ因縁かくとぞ知られける。地時に向うの川岸に。松明提燈まつあかりきらめきて。フシながら晝の如くなり。詞ム、さてこそ。敵方の捕手とらの人数。押寄すると覺えたり。此ひまに落延びんと。地臺もろ共。フシいっさんにやう／＼通れ落ち給ふ。地程もあらせず竹澤監物。數多の家來一同に船にこみ乗り。詞ヤア／＼者共。頓兵衛にいひつけおきし相圖の太鼓の聞えしは。落人を生捕りしと。待てども／＼沙汰せぬは。仕損ぜしと覺えたり。おつかけて討

ちとめん。いそげやつと下知すれば。地櫓をおし立ててえいさつさ。川の半に乗出す。コハハ不思議や俄に風おこり。川波逆立ちかき曇る。空に雷電かみかみ霹靂ひびくフシさまじ。くも亦怖ろし。數多の家來を始めて。水主櫓取色ちがひ。不敵の竹ア卑怯なり者ども。此川にて去年の冬。義興めを殺せし故。恨みをなすと覺えたり。シヤなに程の事あらんと。地虛空をにらんで立つたる所に。空中より聲高く。詞ヤア／＼竹澤監物秀時たしかに聞け。汝が術に亡びたる。新田左兵衛佐義興が。一念爰に顯はれて恨みをなさん。思ひ知れと。地呼ばはる聲の下よりも小山の如く波立つて。舟をゆり振をゆりおろせば。廣言吐ひろことばきし竹澤も。五體わな／＼膽たん裂ひび色。猶も吹き来る暴風。船は碎けて飛散れば。數多の家來一時に。底のフシ藻屑となり

にける。地中にも強氣の竹澤が。波を清つて泳ぎ行く。上より黒雲覆ひかゝり。甲冑を帯したる義興公の御姿。馬上ゆくしく出立つて。御手を伸べて竹澤が頭をく抓つかむと見えけるが。二つにさつと引裂いて。今こそ恨み晴れたりといふ聲ともに船中にて。亡び失せたる十騎の魂魄。君を守護してあり／＼と空中に顯はるれば雷も鎮り浪風も治る御代の末までも。運を守りの御神徳。十騎の宮と諸共に仰がれ。給ふぞ有難き

第五

地新田左兵衛佐義興公。怒りの一念止む時なく。鎌倉六波羅の館にて雷鳴數度に及びければ。御怒りをなだめんと矢口の村に社を建て。今日けふ巡宮と聞き傳へ。フシ參詣群集をなしにける。地鳥居の方より人拂ひ。勅使のお入とさ／＼めけば。新田

小太郎義岑公。裝束更め出で給ふ。兵庫助信忠は徳壽丸をかしづきて、マシ禮義。

たゞしく控へ居る。地程なく勅使四條大納言隆資卿。設けの席に着かせ給ひ。詞

ホ、めづらし、義岑。それなるは徳壽丸よな。さても義興が靈魂。鎌倉六波羅の

館にて種々の恨みをなせしゆゑ。尊氏義詮恐れをなし。南北朝御和睦調ひ。天下

太平に治り萬民安堵の思ひをなすも。全く義興が神靈の徳。古今に類なき忠臣と

叔感殊に麗はしく。新田大明神と崇むべし。又悻徳壽丸は新田の城を賜はり父が

本領安堵すべし。義岑は少將に任官し昇殿を許し給はる。兵庫助が忠勤。南潮六

郎が節義叔聞に達し甚だ感じ思召さる。義岑宜しく沙汰あるべしとの諭命。地猶

も忠勤勵むべしと聞いて兩人有難涙。義岑公謹んで。詞コハ有難き勅諭。此上な

がら宜しき様。地奏聞願ひ奉ると勅答あ

れば兵庫助。詞尊氏公の執權島山道誓。清忠卿と心を合せ天下を奪はん工みにて。

親しき一家の新田足利争亂に及びし段。彼等が惡事顯はれ兩家御和睦のしるしと

て鎌倉より兩人に繩をかけ引渡されて候なり。地それ／＼とありければ。ハツト

いらへて道念が下知に随ふ守護の武士。二人のなは付き引出すマシ折こそあれ。

地思ひがけなき後の方開をマシどつとぞ上げにける。地コハ何事と見る所に。江

田判官景連手の者引き具し追取り卷き。詞ソレ遁すなと下知すれば地心得兵庫は

若君を道念に抱かせて。當るを幸ひなき散らせば。むら／＼ばつと逃散るを遁さ

じマシやらじと追うて行く。地其隙に江田判官二人の繩付き助けんと立寄る所に

不思議やな。鳥居の笠木落ちかゝり清忠景連島山壓に打たれて一時にマシ微塵に

なつて死してげり。地コハ不思議なる神

徳と勅使も感涙義岑公兵庫助を始めとし

て。在合ふ人々下部迄ハツトばかりに三拜九拜。實に著き靈驗は。響きの聲に應

ずることく。水清ければ月やどる諸願成就長久の。君と神との道直ぐに榮ゆる。

御代こそ目出度けれ

明和七年

庚寅正月十六日

福内鬼外戯作

吉田冠子

補 玉泉堂

助 吉田二一

跋

樽ぬき澁柿を笑て曰。汝我身の澁きを恥ず。澁柿答て曰。汝も澁を抜ずんば澁く。我も澁をぬかば甘からんと。善悪は本不二なり。一日吉田冠子來りて淨瑠璃の作を請ことしきり也。されば盲は蛇に畏ず。小戸はぼた餅に遜すと。不稽無上の筆任せ。只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらず。其餘は闇雲に綴合せども。今をはじめの作者の巢立。しかも初日の急なれば。引書を関に遑あらず。校合も足されば其誤多からん。澁のぬげざる澁柿の。澁き所は容したまへ。寅の初春中旬。作者甲析福内鬼外。まじめに成て

誌す